
新たなるEXA

カオスwww

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新たなるEXA

【Nコード】

N9719S

【作者名】

カオスwww

【あらすじ】

最終戦争、それが決着し、最高の未来を作り出した究極魔法。だが戦いは終わらない。異界の世界ではじまる新たな戦。多くの謎に包まれた敵、そして……12人のマホウツカイと別世界の魔法使い達の戦いが起こる！！

始まりのお花見（前書き）

はいどうも！カオスwwwです！

f o r t i s s i m o E X A / A k k o r d : B s u s v i e r
をやって勢いで書いてしまいましたwww

まあ、呼んでくださる人がいれば幸いです

あと、私は専門学生なのですが、今大事な時期でもあるので更新は遅くなりがちですが、ご了承ください

始まりのお花見

とある島、温かい日差しの中、少年は買い物袋をもって目的地へと向かう。

「はあ、これで全員分か。まさか、あいつらまで来るとはな」

溜息を吐きつつもどこか楽しそうに少年、芳乃零二は道を歩く。

「しかし、いまさらな気がするな。あそこでお花見とは」

ことの始まりは前日の朝、彼の通う星見学園に通学中の時のことだった

「お花見しよ!!」

と、通学の途中にいきなり後ろから抱きついてきた里村紅葉からのものだった。星見学園の制服の上に赤い上着を着ており、頭にはキラクターの絵が入った帽子のようなものを着けている。零二に一目惚れをし逆ナンをしてからはずっとこのようにあの手この手のアピールをしている

「いきなりあらわれて唐突だな里村…どうしたんだ突然？」

そんな彼女に慣れているように見えるが、内心すこしドキドキしているのを隠し、冷静に聞く。

「むっ、せつかくこんなかわいくて美人な子が抱きついてるのにそれはないでしょ！」

「毎度のことでもう慣れてきたんだよ。あと、美人は自分で美人とかわない」

「むっきー！なにさ、なにさ。もう少し反応があってもいいじゃん！」

「はいはい、今度からそうする。というか、話がそれてきてるぞ」

「おっとそうだった」

というとき零二の背中から降りてとなりに並んで歩きだす。

「いやね、よくよく考えてみると、あんなに大きな桜があるのにお花見しないのはもったいないなーって今朝思ったのわけ！で、1人じゃつまらないし、せつかくだから零二を誘ったの」

紅葉の言う大きな桜とはこの島にあるサクラの木でも最も大きく美しい花で零二のお気に入り場所でもある

「ほー、なるほど……で、真実は？」

「なっ！なんでそうなの……昨日見た雑誌が原因だと思うよ」って、なぎさ！」

「ごめん。話聞いてたから」

通り道から来たのは紅葉の親友の鈴白なぎさである。長い黒髪を両

サイドに束ね、教科書が入った鞆とは別に、剣道で使う竹刀が入った袋を持っていた。

「へー。で、その雑誌ってどんな内容だったんだ？」

「えーと、確か…『恋の開花にお花見を、花の開花と共にハートを開花させろ！』っていう記事で…」

「わかった、もうその先は言わなくていい」

話が長くなりそうなのと、どう考えても胡散臭すぎる題名を聞きその先を聞くのやめた。

「もぉーなぎさぁー！！言わないでよぉー！もうちょっとで落とせたのに」

「どこがだよ。かすりもしてないぞ」

「れーじもそんなにあっさりと言わないでよー！」

「あははは。今日も仲がいいね」

苦笑しながらなぎさはそう呟いた。

「でもまあ、お花見っていうのはいいかしんないな」

「えっ！じゃあ！？」

「けど、2人でもつままないし、もっと大勢呼ぼうぜ」

「むむ、それって、あの女も入れるわけ？」

紅葉の言うあの女とは零二の義理の妹、黒羽紗雪のことである

「まあ、そうだろうな。あ、もちろん鈴白もだからな」

「あ、ほんと？ありがとう芳乃くん」

「龍一もつれてくるからな」

「ふ、ふえ！？そ、そんな、でも、い、いきなりすぎるよ！」

「むーあの女が来るのは心底滅入るけど、まあ零二の隣に座るので我慢してあげる」

「ほんと、お前らもいつも通りだな」

場所と時は変わり星見学園

「つーわけだ、参加するだろ？龍一」

「うん。かまわないよ」

さわやかな笑顔で答えた少年の名は皇樹龍一、右手に黒いグローブを着けており真面目な少年であり、鈴白なぎさの

「鈴白も来るから、そこところはしっかりエスコートしろよ、この朴念仁の唐変木」

「う、君にそう言われると、言い返せないよ。でも、わかってるさ」

「ほんとかなぁ？この前なんてせっかく鈴白が作った弁当を…」

「ちゃんと全部食べたじゃないか！？」

「ああ、たべたな。鈴白がせっかく食べさせてあげるって言ったのを断ってよお」

「自分でできることは、なんでも自分でやらないと。あとで困るのは、自分なんだぞ！」

（だめだこいつ……鈴白も大変だな、こんなのが彼氏だと）

そう彼氏である？

「なんで疑問形なんだ！？ってそれもそっか」

「？誰と話しているんだい零二？」

「なんでもねーよ、ひとりごとだ。ともかく明日だからなそれと、大丈夫だとは思うが、場所取りは任せたぜ。そんじゃ、俺は紗雪と美樹を誘ってくるぜ」

後に零二はこの時のことを後悔することとなる

そしてその日の夕方、居候先の相楽家。

「サクラ、お前も来るだろ？」

家に帰った後、零二の文字通り二心同体のパートナーであるサクラに今回のお花見について説明すると

「もちのろんなんだよ!!」

まるで子供のように大きな声ではっきりとそう答えた。

「マスター、私お弁当作るんだよ。マスターのために…」

「気持ちだけ受け取っておく」

「ええええええ!!」

「おまえ、まだカレーしか作れねーだろ。この前のクッキーもどきは正直死ぬかと思ったぞ」

零二の言うクッキーもどきとはそれをクッキーと呼んでいいかというものだった。彼女いわく、「マスターが好きなものを入れるのがいいよね」ということで隠し味に香辛料として豆板醤や鷹の爪といったものを入れた激辛クッキーを食べた零二はそのあとしばらくの間何も食べられなかったという

ちなみにお菓子も料理も、基本は本やネットに書いてある通りにすればそこそこおいしい。それで失敗するものの大半の理由は料理のことをあまり知らないのに隠し味と言って余計な調味料を入れてしまうのが原因である。

「ぶーマスターがひどいんだよ紗雪ちゃん」

サクラは零二の義理の妹である紗雪によよよ、といった感じに寄り添う。

「あはは。でも、サクラちゃんも少しずつ上達してるから、もっと頑張れば次の機会に食べてくれるかも」

いつも通り、静かだが透き通るようにはっきりとした声でサクラを励ました。

「うん！マスター食べてくれるよね！」

「ああ。お前の腕が上がったらな」

そういうと「やった」といって飛び跳ねる。

「それにしても、美樹さんと相楽さん残念だったね」

「しかたねえよ。美樹は当日の日がバイトで、莓さんは親父たちとの都合なんだからな。ま、その分俺達が楽しめばいいさ」

ちなみに零二の言う莓とはこの家の主である相楽莓のことである。

「うーん！はやく朝になってほしいんだよ」

「お前は遠足前の小学生か」

笑いながら零二はそう言った。

そして翌日

零二、紗雪、サクラは目的地の途中で紅葉となぎさに合流し、そのまま進んでいる。ちなみに紅葉と紗雪は遺伝子的に仲の悪い犬猿の仲。あつた瞬間に喧嘩したのは言うまでもない

そして目的地到着すると……喧嘩中の2人までもが思考を停止する状況だった

「えーと……………」

零二は目の前にいる者たちをじっと見る。

「おっ、ようやくときたんか芳やん！」

関西弁をつかい零二に話しかけてきたのは自称零二の親友、霧埼剣悟。目は細めをしておりフランクでオープンエロスな男である。ちなみに関西弁をつかうが彼は関西出身ではなく島人である。彼いわく、関西の人に憧れているからこのような言葉をつかっている。

「霧埼！？なんでお前が！」

「水臭いで〜こんなイベントに親友ワイをよばんなんて〜」

零二にとってはこれだけでも驚きだが問題は

「やあ、里村。今日も美しいね」

「げっ、がきんちょ……………」

小学生くらいでませた感じを出しているこの子供の名は有塚陣。子

供である彼はその年に見られる自己陶醉感があり大抵の他者を見下している。いっちょまえに色気ついて紅葉にアタックするが

「それで、僕のものにならないかい？」

「ごあいにくさま、あたしは零二一筋なの。がきんちよのあんたに割く時間は1秒もないの」

といったように全く見向きもされず、それどころかこのようにドライである。

「んなことあ、どうでもいいだろう！！さっさと始めようぜ！！」

陣と紅葉のコミュニケーションを遮り話しかけてきたのは巨大ながたいをし、全身の筋肉が張り出てる男名前は自称最強無敵の進化する天才、轟木鋼である。彼のことを言い表す言葉があるとすればそれはただ一つ、バカ。以上である

「と、轟木くん！？」

ちよつと引き気味で彼の名を言う

「おーおっぱいのかい黒髪嬢ちゃんじゃねーか！」

ちなみなぎさは轟木のこと少し苦手である。

「一体全体どうしてこうなった？」

「ああ、それはなあ」

零二の疑問に剣悟は答える

前日の零二と龍一の会話を剣悟は聞いていたらしく、龍一に頼み同行を許可してもらった。さらにこの際だからもっと呼ばうと言つことになり、剣悟は陣と鋼を龍一は

「あつ、零二おにーちゃん！」

「……………」↑（ぺこりとお辞儀をしている）

「なつ、陽菜子に真田のおっさん！」

黒のリムジンから降りてそこに来たのは高嶺病院にいる少女、高嶺陽菜子と黒いスーツとサングラスを掛けたボディーガード兼保護者である真田卿介。一見すると卿介のサングラスから除かれる視線はマフィアを思わせるような感じがするが

「この間は、お嬢のためにありがとうございました」

とお辞儀して言う。

「いえ、そんな。ただのお見舞いですし」

「それでも、お嬢の今があるのはあなたのおかげでもあります」

再び頭を下げる。このように義理堅く、以外と優しい心を持った男なのである。

「にしても、随分と多いな。つか、後二人である意味そろつた」

「あら、おぼえててくれるなんて光荣だわ、零二君」

(――この声は)

その声を聞き後ろを見る。というより、いつの間にかそこにいた女性に気付き反射的に後ろを向くとそこに立っているのは星見学園の生徒会長、雨宮綾音。スレンダーでスタイルもよく、成績優秀、運動神経抜群、料理もできて美人という完璧超人であるが零二は彼女のことが苦手である。

「あーその、雨宮…とりあえず聞くんが、なんでここに？少なくとも俺も里村達も教えてないと思うんだが」

「うふふ、なんでかしら？」

と妖艶な笑みを見せてそう言う。彼女はとあることが切っ掛けで零二を好きというより愛しており、それはもはや歪んでるほどである。零二いわく『ストーリーカー 気質の女神様』

「あーかいちょー！零二はあたしのなんだから、てーださないでよ――！！」

「あら、こついうのは早い者勝ちよ」

「むつきー！それならあたしが最初に零二にアタックしたんだい！」

「俺はどっちのもんでもない。頼むから俺に普通の日常をおくらせてくれ」

ものすごくけだるそうに零二は呟く。男にとってはもてることは嬉

しいことだと零二は理解しているが、この状況を喜ぶべきなのか悩みどころだった。

「あ、芳野さん」

「ん、梶浦！お前も来てたのか」

「はい。あとで俊くんも来ますけど」

梶浦海美、零二の一つ下の学年でありこの島の神社、梶浦神社の巫女さんでもある。ちなみに彼女の言う俊くんとは彼女の恋人である

「ていうか、これで全員そろっちまったな……おい、龍一！」

「零二、どうしたんだい？」

「いやおまえ、この状況は……」

「ごめん霧埼くんだけ許したら他のみんなにも悪いし、それに陽菜子ちゃんは初めてのお花見だろうし」

「まあ、いいけどよ。……ただ、みんなの分の食べ物と飲み物が足りなくなるぞ」

「食べ物は何用意してるらしいけど、飲み物は……」

「了解、なら俺がちよっくら買って来る」

龍一のすまないと云う声を聞いて零二は近くのお店に向かった

そして現在

「よう、買って来たぜ」

「あ、零二。すまない」

龍一は受け取った飲み物を全員に配った

「そんじゃ、始まりの乾杯をするか」

「おーなんだよ!」

「なんや、酒はないんか」

「俺はまだ未成年だぞ。買えるわけが」

その先の言葉を言おうとした時だった

「!!、マスター!!」

『!!!?!?』

そこにいる者たち全員がサクラの指した方を見て驚く。無理もないだろう。空に穴が開いたのだから

「な、なんだありゃ!?!」

「わからないけど、強力な魔力を感じるんだよ!」

「みんな気をつけて!!」

龍一が声をかけるがもう遅い。穴は全てを吸い込むかのように俺達を強力な引力で吸い込もうとする

「うぐわっ!!さ、サクラ!」

零二はサクラの手を取り、サクラは紗雪の手を取った

「芳やん、掴まらせてもらうで」

霧埼は零二の足にしがみついた

「つて、こら離せ!」

「なんでそないな言うんやねん!」

「いやお前、バランス取れなっ…うおお!!!!」

「零二!」

「芳野くん!」

そして、そのまま4人は穴にのまれた。

「まずい、僕達も!!」

陣はこの状況に落ち着きながら、自分の能力を出そうとするが

「くっまにあわな…うわぁ!!」

「ぬおおおお！！俺様もすいこまれるつつつつつつうううう！！」

「うわ、うわわわわ！」

「！（零二君、今行くわ！）」

陣、鋼、海美、綾音は引力に逆らえず吸い込まれる。……一名は自分から飛び込んだが。

「お嬢！つかまってまってください！」

「う、うん」

卿介はしっかりと陽菜子を守るように抱きしめるがそれでもこの引力に逆らえず、吸い込まれる

「！なぎさ、里村！」

龍一はなぎさの手を取ることができたが

「も、紅葉！」

「くっ、くそおお！！！」

なぎさは必死に手をのぼすがあと少しのところでは届かず、紅葉もその穴に飲み込まれる。

「なぎさ、君はその木につかまっててくれ！」

「りゅ、龍一!？」

すると龍一はあろうことか自分から穴に向かおうとなぎさを庇い、
抗いをやめようとする。

「まって、私も行く!」

「なぎさ、けどこれは――」

「私はみんなを助けられなかった!だから、お願い!」

「――
わかった」

龍一はそのなぎさの想いが本物で、彼の心を動かした。2人はしっかりと肩を組み、そして中に飲み込まれた。その後、穴は閉じられた。後に残った者はいない。

そして、これが別世界で次元震と呼ばれていること、そしてその世界で彼らに大いなる戦^{いくさ}が起こることも、彼らの世界をも脅かす事態になることも、まだ、だれもしらない

始まりのお花見（後書き）

本日は続けてもう1話出します。

目覚めた場所と魔術兵装（前書き）

もう1話です

これからさきは投降するのマジ亀になりますww

目覚めた場所と魔術兵装

「——ん、ここ、は…」

ガタゴトという音と揺れを肌で感じ、零二は目を覚ました。

周りは壁に覆われ、狭く暗い場所。なぜこんな所にいるのかはわからないが、少なくとも やばい事態 だというのはよくわかっていた。

「くそ、どこだよここは！」

行き場のない怒りを声に出す零二だったが、そこに

「！、兄さん！」

「やっと起きたんだよ、マスター！」

「紗雪、サクラ！」

自分の家族を見つけ、ほっとした。すると今度は

「おつ、芳やん！よーねとったから、心配したけど、大丈夫そうやな」

零二の友人、剣悟が現れた。

「霧埼……………ふん！！」

「うおわ！！あ、あぶな！」

と有無も言わず零二は剣悟に殴りにかかった。それを紙一重でなんとかかわすも剣悟は混乱していた

「霧埼、一発殴ってもいいか？つつか、殴らせろ」

「もう殴りにかかって来とるやん！？とうより、拒否権なしなんか！？」

「兄さん」

「おおお！さつつん、たすけて——」

救いの手がさしのべられて、安堵する。が、

「私も殴りたいから、殴っていいかな？」

「くれへんのかあああああ！！ちょ、ちょ、ちょおおとまって！な！今は現状把握が一番やろ！？」

「まあ、それもそうだな。とりあえず見逃すか」

「ほっ」

「って言うんでも思ったか！おめーがあんとき俺の脚持ってたからこっとなったんだろ！！」【バコ！】

「あいたああああ！」

本気ではないがやっぱり痛い一撃が剣悟の頭にヒットした。

「よし、とりあえず少しすっきりしたところで、ここはどこだ？」

「ちょ、ひどくないか？それはないやろ芳やん」

「そうされることをしているあなたに非がある」

「霧埼くんはもうちょっと性格を改めるべきだとおもっただよ」

「ちょ、さつつんもサクラちゃんもひどすぎるわー！つか、性格関係あらへんやろ！？」

三人は剣悟の言い分を完全に無視して調査をする。剣悟もしびしびといった感じだが、周りの調査に参加した。

「とりあえず両端に扉があったけど、あかねーし、この揺れと音がらして、まず間違いなくここは列車の中だってーのは確実だな。つまり、」

「少なくともここは月読島じゃない。月読島は小さい島だから、電車や車はない」

「せやけど、ワイらの記憶が正しければ、あの空にあいた穴に吸い込まれた後にしては、随分と変なところにおるな」

「そういえば、穴があらわれたとき、ものすごい魔力の渦の感じもしたんだよ」

サクラからの情報も聞き、零二は1つの結論を出す

「つまり、ここどこだかはおいとしたとしても、これが超科学、つまりは俺達と同じ・・・」

「可能性として、それが一番高いんだよマスター」

「せやったら、これはあのときみたいなのとはちゃうんか？」

「もしそうだったとしたら？」

紗雪は警戒100%の眼で剣悟を睨みつける。

「おお、こわっ。安心しいこっちもサクラちゃん相手やったら分が悪いのがわかるんやし」

しかしそれでも警戒する紗雪。少しでも動けば一触即発の状態である

「おい、二人ともやめろ。……サクラ、何か感じるか？」

「うーん、！！近くにいますよ。けど、私達の知らない人みたいなんだよ」

その発言にサクラも含めた全員が驚く。なにせ自分たちの知らない同じ存在がいるのだから

「OKなら俺が他の皆を呼んでから……」

零二が自身の能力ちからを使おうとした時だった

「！！、兄さん、あぶない！！」

「!？」

紗雪の直観を聞き、零二は反射的にそこから離れた。すると近くに
あった扉が吹き飛び、隣の車両から、球状に近い形の機械がぞろぞ
ろと現れた。

「こ、こいつらは？」

「見たところ、誰かが作った兵器。それも自動型の」

「せやけど、あくまで科学にすぎひんのやったら、たとえさっきの
光線みたいなんでも大丈夫やな」

「けど、このままいたぶられてもいいことなしなんだよ!」

普通の人間ならばこの状況、この戦力、そして相手の力を見れば死
を覚悟するであろう。だが、彼はその必要などない。なぜなら彼ら
は人智を超えた兵器と身体を持っているのだから。

「サクラの言うとおりだな。……なら、いくぜ!紗雪、霧埼、サク
ラ!!!」

「まかせて、兄さん!」

「芳やんとこうして組むんは初めてやな!」

「任せてなんだよ!マスター」

彼らは過去、とある1つの宝石を手にした。それは、彼らと融合し、
彼らの想い、象徴、心象を具現化する能力^{ちから}となった。

「ああ。ただしサクラ、俺が許可しない限り、あれは使っなよ！ここじゃ、使ったら何が起きるか分かんねーからな！」

「了解なんだよ！」

「まあ、そんなもんとワイなら余裕やけどな」

「油断は禁物」

「わかつとるで、さつつん」

紗雪と剣悟はその力を具現化する「呪文（言霊）を世界に投げかける

「ゲイト・オープン
魔術兵装」

2人の周りに魔術ルンの風がふく、そしてそれが晴れた先にあつたのは

「ほな、やるとしますか？」

「足を引つ張らない程度で戦つて」

紗雪は剣悟にそう言いながら白と黒の拳銃を目の前にいる兵器に向ける。手首には細長いリボンが巻かれており、風で揺れる彼女武器、2挺拳銃の《うたまる&アルキメデス》だ

「まあ、そういわれんでも、役に立つでワイわ！」

剣悟の周囲に無数のナイフが宙に浮いており、剣悟を守る悪魔の牙の如くゆつくりそのまわりで浮遊する。その数は全部で666本。

そして、666本にして1つの武器なのである。それこそが彼の持つ武器
ストーリームファイルド
そして

「そんじゃ、準備はいいな、サクラ！」

「いつでもなんだよ！」

サクラの服装が戦闘スタイルの服へと変わる

そう、彼女は零二の兵器。人にして兵器、名を《サクラ》そして、これらの人智を超えた兵器の前に、愚かにも傀儡^{ドール}は戦闘を選んだ。だが彼らでは倒せないであろうことを、この四人は完全に確信する。その兵器の名は、彼らは《戦略破壊魔術兵器》。通称、《マホウ》と呼び、そしてそれを自由自在に自らの手足同様に使う者を、彼らはこう呼んだ

——《召喚せし者》。通称、《マホウツカイ》と

SIDE・END

HAYATE・YAGAMI

「なんや、これ？」

ここはとある組織の部隊の制御室。そこを指揮していたグリフィス・ロウランもいや、これを見ているスタッフ全員があり得ない者を見ていた。そしてついに、ここに到着した部隊長、八神はやては皆が言いたいその一言を口にした。

「も、センサー確認できる最後尾の車両にある数は…669個です」

スタッフの眼鏡女性がそういうとikaにこの状況がとてつもない状況がわかる。

「！、ともかく、急いでフォワード部隊に連絡を！迅速に目的地に着くように要請！」

「「りよ、了解！」」

「……最悪、私が出なあかんかもしれへんな」

「はやて部隊長自ら、ですか！？」

グリフィスはその言葉に驚く。何も危険だからではない。はやての想像を斜め上に行く実力を知っているからこそだ。

「あれだけの『ロストログア』はありえへん。それもいきなり増えるなんて考えられへん。なにか危険な物の確率は充分以上にある」

「！！」

はやてにこう言わせるとは、つまりはそう言うことなのである

「ともかく、いまは現状待機、フォワードの皆の動きを見てからや。それにレリックもあるんやし」

「了解しました！」

はやてはあくまでも落ち着き、部隊長の椅子に座るがその瞳はどこか焦っていた

（気をつけてな、皆）

部隊長という役職がある以上、簡単にここからは動けない。本当ならこんな状況ならいち早く飛んでいきたいがそれはできない。だからこそ、今は祈るしかないのだった

SIDE・END

REIZI・YOSINO

「これで、どうやつ!!」

無数のナイフが一直線で飛んでいくそれを機械は避けるが

「無駄や——エイレナイオス踊り狂う悪魔——っ！」

意志を持つかのように曲がり命中。1本、1本ではまるで貫通しないが塵も積もれば山となる一氣に何百の数を切りつけられ、貫通する。雨のように降り注ぐナイフになすすべもなく切り刻まれ、次の標的へと剣悟が誘導する。これこそかれのストリームフィールドの能力《エイレナイオス踊り狂う悪魔》生物を除いたありとあらゆる物体を念動力で自由自在に動かす。

しかし666ものナイフを操らなければならぬため、並みの人間では他の物体を操作するほどの思考的余力は存在しない。だがそれでも剣悟はそれをうまく生かし、ナイフで相手を着実に切り刻むことができるのだ。

「くっ、もう一度なんだよ、紗雪ちゃん！」

「わかった！」

サクラと紗雪は苦戦をしていた。サクラの手の平から放たれる小さなボールほど大きさの魔力弾と紗雪の2挺拳銃からでるそれよりかはもう少し小さい白と黒の魔力弾が一斉に連続発射される。敵をハチの巣にするがごとく目標へと向かう。だが、

「また四散したんだよ！」

「どうなってるの!？」

彼女たちの攻撃は当たるところか直前に四散し消えた。

「おそらく、敵の能力だろうな。ある程度の魔力なら無効化できるといったところだろ」

「そんなものを開発できるのも凄いけど、その技術があることは」

「ああ。そうだぜ紗雪。ほぼ間違いなく戦略破壊魔術兵器^{マホウ}について何か知ってるやろーってことだ」

「せやかて、この程度ならさつつんもサクラちゃんも魔力を籠めて撃てば、問題ないなしやる？」

「当然なんだよ！」

「今度はこっちから反撃する」

紗雪は再び構える。すると両手の銃が黒い銃は黒く、白い方は白く輝きだす。魔力を籠め、その必殺の一撃を与える！

「Auf Wiedersehen」

放たれし白と黒の威力を感知してか、それを避けるが無駄に終わる。なぜならすでに狙いは付いているのだから。

「——福音の魔弾——！」

ヴァイス・シュバルツ
敵を認識した2つの弾丸はまるで十字架のような形を描いて交差し、完全に避けたはずの2機を粉碎した。これが彼女の武器の能力、相手の音を認識して追尾する《福音の魔弾》ヴァイス・シュバルツどんなものでも動いている限り微弱な音は必ず出す。それを認識し、どこまでも追尾する。単純だがその能力と武器の形は最高に相性が良かった。

「ふう、こつちも終わったんだよ！」

「まったく、それにしても前にまだおりそうやな」

剣悟はめんどくさいと今でも言ってもおかしくない感じで呟いた。

「敵を倒しながら前に来たが、どうもまだ先があるし、それに」

「兄さんの能力の一部が使えないのは本当？」

そう、零二は自らの能力を使い仲間を呼ぼうとしたができなかった。零二の能力は《復元する世界》ダ・カーボ24時間以内に出会った人物を呼び戻す、または物質を24時間以内の状態に戻す能力。

マボウツカイ
零二はその力を使い紅葉や龍一など同じ召喚せし者を呼ぼうとしたがそれが出来なかった。いや、発動すら出来なかった。だが、物質

を24時間以内の状態に戻す能力は使えたので全員の傷を即座に回復できた。

もともと召喚せし者^{マホウツカイ}は未知の超科学鉱石と融合し人智を超えた存在となった。それ故に如何なる科学兵器を用いても殺せず、たとえ頭を粉碎しても、ものの数日と言わず回復する。だがそれは、相手に追撃のチャンスを許すことでもある。それ以前に自ら頭を粉碎されたい人間などいないが。

零二の能力はそれ事態は召喚せし者^{マホウツカイ}にはたいしたことはないが治癒をさらに速めたり、仲間をすぐに呼ぶなどサポート面では大いに役に立つ能力。だがなぜか今の零二は召喚ができなかった。

「ああ。できない。でもいつたいどうして」

「それは……」

零二の疑問にサクラが申し訳なそうに呟こうとしたが、

「！！、魔力を感知したんだよ！さっきも確認したマスターたちも知らない誰かの！」

「なんだと！どこに？」

「この上なんだよ！」

「お話の最中やけど、やつこさんがまたきたでえ！つか、もうこいつらいやや、見るのも飽きたし壊すんも飽きたわ」

「そういうな。（ともかくこう狭いとラチがあかねーな）」

零二は一瞬考える。

「よし、霧埼、こいつらにもっとも有効な力を持つてんのはお前だ！ここを任せていいか？」

「面倒やけど、まあダチの頼みや、引き受けたで」

「紗雪は、霧埼が明けた道を前に進んでくれ。列車の一番前に行けば止められるはずだ。敵とは最低限に戦うだけでいい。ここじゃお前の戦闘スタイルは出しにくいが、一番早いのはお前だ」

「うん。まかせて」

2人とも互いのするべきことを聞き、それを承諾した。

「俺とサクラは一度後ろに戻って上に行く。さっきの戦闘で、一番後ろの扉も壊れて開くからな。」

「了解なんだよ！」

「ほな、まずワイが前の道を開くでほらあ！！！！」

ナイフのほぼ半数以上を攻撃にまわし突破口を開き、紗雪の軽い動きで前に進む。

「よし行くぞ、サクラ」

「うんなんだよ！」

SIDE・END
SYUKI・KUROBANE

指示を受けた紗雪は素早く行動する。それは兄の気持ちに答えるためでもある

「ようやくこいつらにも慣れてきた」

紗雪はこの短時間でいかに魔力多く使わず、厄介な今回の敵を倒すかを考え何度か撃ち、そのなかでもっとも効率のいい魔力を籠める方法をすぐさま導きだした。その結果、兄は相手すると言ったが、向かってくる敵は排除した。なぜなら、もう今の紗雪の分析では苦もなく勝てる相手に入ったからだ。

「！、あまい！」

白と黒の銃に魔力を少しずつこめ、ちょうどいい具合に発射する。一見乱射に見えるが全て当たる。能力など使わずとも紗雪の技術は上の上は確実に行っていた。時には華麗なまでな動きで回避し、同士討ちもさせた。

「もうとつくの昔に、あなた達の勝機はない」

そしてこの車両にいる最後機械に止めを刺した時だった。

「！こ、この揺れは！？」

突然後部車両の方が揺れた。兄が心配になったが、今は目標に集中することに意識を変えようとした時、突然前の扉が開き、両手に同じ形をした二挺拳銃を持ち、戦闘服だろうか奇妙な服を身にまとっ

たオレンジ色の少女が現れる

「「!？」」

ふたりは即座にほぼ同時に構えた

そしてそのまま静寂に包まれるが、最初に発言したのは紗雪だった。

「あなた、何者？」

のちに、この二人の関係が大きく変わることなど、まだ知るよしもなかった。

目覚めた場所と魔術兵装（後書き）

専門用語がfortissimoには多いから大変ですがまあ、やってみます

あと書いた割にはまだリリなのキャラそんなに出てねwww

霧崎VSスバル／神討つ拳狼の蒼槍（前書き）

時間があつた時に書きだめしたやつす。

（ようやくバトルっぽくなつた？）

霧崎VSスバル／神討つ拳狼の蒼槍

KENNGO・KIRISAKI

「ふう、安請け合いやったかなあ」

愚痴りながらも着実に敵をストリームフィールドを操り切り刻み、貫通させる。

「それにしてもほんまめんどうやわ。まとめてやれたらええけど、こんなやつらごときに本気出すんもめんどうやし、何より前にさつつんがおるけん、できへん。ッ！」

新たに牙を敵に向け、貫いた

「やっぱ、地道にやるしかないみたいやな」

ストリームフィールドは戦略破壊魔術兵器とはいえその耐久力、切れ味、貫通力などは普通のナイフと同等である。（しかしマホウはいかなる近代兵器でも破壊できず同じくマホウでなければ破壊できない。）ナイフ1本の力は微々たるものだろう。だが霧崎は自身の長年のカンで、一番防御が低い中央を的確に見抜いた。後はそこに一斉掃射でナイフを叩きつければ貫通力のあるマシンガン以上にも相当する。

「さて後どんだけって、1機しぶといんがおったか」

しっかりと貫通することはできていたがまだ内部機能が生きていたのか、ふらつきながらも剣悟へ向かってくる。

「しつこいやつは嫌われるでって言っても無駄やけどなっ！」

全方位からの攻撃にまわしたナイフの数はおよそ200ほど。何本かは弾かれるが連続し当たると貫通し何本かは刺さったままの状態である。しかしそれでもなお向かってくる。

「しぶといなあ、雑魚キャラはちゃっちゃとやれられるのがスジちゅーもんやで」

うんざりとした顔で止めを刺そうとした時だった。いきなり大きな音をた立てて上から誰かが落ちてきた。いや天井を破壊してその勢いで落ちてきた。そしてそのまま下にいた機械ごと粉碎する

「！？（こいつは……）」

同時に敵に刺さっていた自分の武器がいくつか壊されたことにも気付き少しだけ身がまえる。

「は、はれ？な、何で民間人が？」

（こらまた、かわいらしくも美人なお嬢ちゃんやな、胸もけっこうあるし）

剣悟の前に現れたのは水色でショートで髪で戦闘服らしき物と、脚にはローラー、右手には女性が付けるには重そうなガントレット型の武器を装備した少女であった。

「ひゅーやんなお嬢ちゃん！その細身でどこにそんな力があるんか聞きたいわー」

「は、はあ。どうも……じゃなくて！あなたは何者ですか！その周りに浮いてるのはロストログアですね！それをこちらに渡してくださいー！」

「こまったなーお嬢ちゃんみたいな子にお願いされるんはええんやけど、それはできへんわ」

剣悟はロストログアがなんだかはわからないが自分のマホウを指していると感じ、とりあえずおちゃらけた感じで応える。

「ところで、お嬢ちゃんマホウツカイは召喚せし者か？」

「は、はい！そうですが」

「そうなんか。なら2つめ、………あんたはワイの敵か？」

おちゃらけ感から一気に警戒態勢を上げて質問する。その眼はまるでナイフように鋭い眼光である。

「！ー！」

敵意を感じたのか少女はファイティングポーズをとる

「そういうことか。つまり、お嬢ちゃんはいいつらの敵やけど、ワイらの味方でもないちゅーわけか」

はあ、と溜息をつきストリームフィールドをすべて自分の周りに展開する。

「霧埼!!」

先程。少女が落ちてきた穴から零二がのぞき込む。

「おお芳やん。こっちは立て込むけん、はよまえにいき」

「……わかった!」

すぐに剣悟が本格的に戦闘態勢に入ったことを見た零二はその相手も見ずに前へ進む。恐らく信頼の証と言う奴か、それとも単に邪魔になりたくなかったのか

(まあ、どっちにせよ嬉しい心遣いやで)

そして全てのナイフが自分の手元にあるのを確認して、戦闘態勢に入る

「お嬢ちゃんみたいなかええ子を相手すんのは気が引けるけど、ワイはようやく取り戻した日常を守りたいんや。せやから、おとなしゅう逝つとけや!!」

そして一斉にナイフを敵へと向けた

SIDE・END

SAYUKI・KUROBANE

「あなた、何者?」

紗雪はこの場で闘争をする覚悟はあった。だが、相手の力は未知数。そもそも相手もいきなりでほんの一瞬だけ戸惑いがあった。さらに

ちらりと横を見ると自分が倒したのと同じ機械があることも確認し、少なくともこの機械の敵であることは理解した。

だがそれだけ。自分の敵ではない理由などまだない。故に警戒し、いつでも撃てる態勢にするが相手も同じ態勢なら早撃ちで決まる。極めつけ紗雪の武器は普通に撃つても本来の銃の威力よりやや低い。同じ武器だから相手も同じとは限らない。冷静に分析し、この状況でいちばんの時間稼ぎでもあり生き抜く方法は会話だったのだ。

「あなたこそ、何者ですか？ロストロギアを所持しているのなら、それこちらへ渡して投降してください」

「？質問しているのはこっち。それにロストロギアなんて知らない。もう一度聞くあなたは何者、それと、ここはどこ？」

「え？ロストロギアを知らない。それに、ここのこと。……もしかして」「ぶつぶつ」

小さな声でぶつぶつとオレンジ髪のツインテール少女はつぶやく。

「……なら、質問を変える。あなたは、召喚せし者？」
マホウツカイ

ここで変な感じに思われたり変な眼をすればそれは違つと言つことだが

「…はい。そうですが」

肯定をしてきたので警戒心をあげて次の質問に入る

「なら続けてもう1つ。あなたは私の敵？」

「いえ、こちらとしてはまだ測りかねますが、今はまだ」

「……………信用したわけじゃない。けど」

すつと銃を下ろす。これで何もしてこなければそれでほぼ信用する。仮に何かしてきても反撃する自信は充分にあった。

「……………なら、こちららも質問をと言いたいんですが、それは後にしましょう。仲間と合流しなければいけませんから」

「なら、とりあえずは一時休戦。私も前に言って列車を止めなくちゃいけない」

「それなら、私の上司が向かってますので。できれば、私についてきてくれませんか」

「それは、監視という意味？」

「ええ。嘘を言ったところであなたが警戒をやめるわけないし、それどころか余計悪化するでしょうから」

「たしかに。その方がこちらとしても助かる」

2人は警戒しているがその間には奇妙な関係が生まれつつあった

「自己紹介が遅れたわね。時空管理局機動6課フォワード、スターズ部隊のティアナ・ランスター2等陸士よ」

「時空管理局？」

自分の知らない言葉が出た来て思わず紗雪は首をかしげる。

「あとで説明します。たぶんあなたの状況がどういったものかわかりますから」

「……………そう。そっちが名乗るのなら…黒羽紗雪」

「それが名前ですね。わかりました。じゃ、行きましょう」

SIDE・END

KENNGO・KIRISAKI

「エイレナイオス
踊り狂う悪魔！」

暴風雨のようにナイフが標的を喰らいつくさんとするかのように襲いかかる。

「マツハキヤリバー！」

<プロテクション>

手を前にかざすと少女の足元に魔方陣が展開される。すると彼女を守る盾が手から体を覆うように展開される。

「なかなか高い防御力やな」

剣悟はまず相手の能力を知ること専念した。自身のマホウは攻撃力、スピード、耐久力、そのどれをも捨てて数に特化した兵器。故に

「せああー!!」

ガードを解き、鋭く重そうな一撃で粉々となる。

（せやったら、数もの言わせて全方位からの攻撃でしまいや）

すぐさまナイフをコントロールし敵が前に集中している隙に全方位を完成させた

「!？」

「気がついてももう遅いで、これで、終いや！」

全方位の攻撃逃れるすべもなく全てのナイフは敵を切り裂くだろう。それが剣悟の失態だった

「ウインググロード!!！」

<ウインググロード>

「なんやと」

いきなり現れた青い道が上に伸びローラーに着いたエンジンがかかり上昇し回避そのまま穴を通り抜け旋回しまた穴をあけて

「うおおおおおおおおお！」

「ぐおお!!！」

ついにその一撃がクリティカルヒットに決まる

宙に浮く感じがした後、剣悟はすでに吹っ飛ばされていた。

「うお、ぐっ、うはあー!!」

全身の骨が砕けたかのような感触が一瞬入ってくる。

「はっ、やつぱ、召喚せし者^{マホウツカイ}なだけはあるちゅーやつか」

自分の立てた戦略になど、さほど意味などないのだと改めて実感する

「これで終わりです。投降してもらいます」

「そうは、ぜえ、ぜえ、いか、へん!!」

剣悟は立ちあがり、ストリームフィールドを再び自分の周りに展開する。

(さつつんはもう充分前にいっとるはず、なら、)

自分のとっておきがだせる。そうしなければこちらがどんどん追い込まれることを把握した。万が一紗雪がこれに巻き込まれようと、恨みを買おうと、生きなければならぬ。この状況で情に流されるよりはよっぽど正しい選択ではあった。

「お嬢ちゃん、ワイには守りたい日常があるんや。たとえそのために他を犠牲すんやとしても、守りたい日常がな!せやから、もう手加減はせーへん。ワイのとっておきを見せたるわ!!」

そして自分の力を発揮するため、魔術^{ルン}を一気に練り込む

「さあ、いくで。こいつがワイの、とっておきや!」

そしてそれを解放……

「そこまで!!」

する前に紗雪に止められた。

「な、なんや？さつつん」

と、よくみると隣にはオレンジ髪のスィンテールで、剣悟の相手と同じような戦闘服を身にまとった少女がいた。

「さつつんを人質ってわけでもなさそうやな。どういうことや？」

「わたしたちは、あなた方との戦闘を望んでいるわけではありません。一度、武器を下げてくれませんか？」

「せやけど、ワイはそこのお嬢ちゃんが敵意を見せとったんやけど」

「そ、それは、あなたの眼を見たら……」

とここでようやく水色の髪をしたショート少女も話しに加わる。

「人を見かけで判断せんで欲しいわ」

「それはあなたの性格のせい」

紗雪はきっぱりと言う。

「やから、そんなこと言わんといてーな」

「ともかく、いま私たちは一時休戦をしている。ここはそうするべき」

「……なるほどな」

つまりは信じるにしろ信じないにしろ、共闘する間は攻撃の意思はないということ。それは今の紗雪を見たらわかる。紗雪が何もしないのがいい証拠なのだ。

「わかったで。……さっきはすまへんな、お嬢ちゃん。霧埼剣悟や」

「は、はい。こちらこそ。こっちが勘違いしなければこつはなってますでしたから」

とぺこりと頭を下げる。

「スバル、それと自己紹介。向こうもしてるんだから」

「ああ、ごめんティア。時空管理局機動6課フォワード、スターズ部隊スバル・ナカジマです。」

「同じく私はティアナ・ランスター」

「なんや、その時空なんちゃらっのは」

剣悟は首をかしげる。

「説明は後で。ともかく、いまは協力してください」

「まあ、敵やないんやったら、こないなかわええお嬢ちゃん達の頼みを聞かんわけにはいかな」

「……………」

「たのむけん、そんなゴミを見るような眼はやめてーなさっつん！」

「こういう人だから。2人とも気をつけて」

「「はい」」

「なんでそんなはつきりとうなずくん!？」

結局剣悟は3人から別の意味で要注意人物に断定されたのだった

「ところで、芳やんはまだ上に……………」

その先の言葉を言う前に上の方から凄まじい音がした

SIDE・END

REIZI・YOSINO

「んだよ、こりゃ」

外に出た零二は目を疑った。かれは数年前まで自分の生まれた島、月読島を離れて都会に行っていた。その風景や電車に乗ったことはある。だからこそ、確信する

「少なくとも、ここは日本じゃねーな」

「広いんだよ」

そう広い。前方には森が地平線の彼方まで続いており、列車の下はがけになっており、谷底が見えないほどだった。

「ともかく、さっきの揺れも気になるが、今はさつさと上に上るぞ」

「うん。けど、車内にも反応があるんだよ」

「そっちは霧埼と紗雪がいる。あいつらはそう簡単にやられねーよ」

とはいうが内心信じる想いと不安な思いが入り混じっていた。しかし、いまはこの状況を打破すること。故に止まらない。

「よし、上に到着って何だあの穴は？」

見ると列車の車体の上に人が簡単に入れる穴が開いていた。急いでその場所に向かうとサクラも後に続いてくる。そしてその穴を除くと

「霧埼！！」

剣悟が敵と向き合っていた。この位置からでは影になり相手の顔はよく見えてはいないが女なのは間違いない。

「おお芳やん。こっちは立て込むけん、はよまえにいき」

そのことを聞いた瞬間理解した。霧埼が本格的に戦闘態勢をとっていることに。そして自分を信じると言いかけていることを

「……わかった！」

零二はそれだけ言って前に進む。

「サクラ、足元に気をつける。今の俺じゃ、助けることはできねえからな」

「わかってるんだよ」

そして進んでいくと小さな影を見つける。

「あれは、子供か!？」

桃色の髪をし、白い帽子と白いマントを着けた女の子がしゃがんで車両の上にいた。

「!あのこから魔力の反応……あれ、けどおかしいんだよ!？」

「どうした?サクラ」

「魔力が感じられるけど……あの子、マホウツカイ召喚せし者じゃないんだよ」

「なっ、それじゃ、マジシャン見習い術士ってことか?」

《マジシャン見習い術士》それはマホウ戦略破壊魔術兵器とリンクしただけで、具現化することができない者のことである。だが

「うっん、違うんだよ。でもマホウ戦略破壊魔術兵器に近いものを感じるんだよ」

「なんだよそりゃ?」

「分かんないんだよ。私の対魔術兵器戦略思考はあいてが戦略破壊^{マホウ}魔術兵器を使ってくれなきゃ正確なことはわからないし」

ミリスプルン
《対魔術兵器戦略思考》それはサクラに標準装備された能力で使用された戦略破壊^{マホウ}魔術兵器の能力を瞬時に見抜き、記憶する。逆を言えば、相手が使わず温存や逃げに生じた場合見抜くのは事実上不可能ということ。

「ともかく、あいつの所に行って…て、な、なんだあ！」

その子供の前から機械の大きな触手らしきものが車両から出てきた。そしてそこには赤髪をし奇妙な形をした、槍をもっている男の子が、捕らえられていた。気絶しているのか、ぐったりとしている。そして触手はその子を谷の方に放り投げた。

「なっ！」

「そんな…」

2人はそれをなすすべなく見ていたが、こんどは先ほどまでそれを呆然と見たいた桃色の髪の女の子が自分から飛び降りた。

「なにやってんだ……くそつたれ！」

零二は何もできない自分を本気で恨んだ。能力の使えない自分を

（久々に味わったぜ、この感覚）

怒りをおさえ、目の前の敵に集中する。

「サクラ、さがっ…って、こんどはなんだあ!?!」

谷底の方から桃色の光が見えたそして、竜が上がってきた

「な、なんなんだこりゃ!?!」

「あつ、マスターみて!さっきの子たちが乗ってるんだよ!」

「!!よかった…なら、こっちもしとめるぜ」

零二は自分の魔力を解放する。その量は神話クラスにものぼるほどの圧倒的な魔力が彼の全身を覆う。

先程の機械の別タイプだろうか、大人と同じくらいの大きさである

「これが、おれの、力だあああああ!!!!」

己の膨大な魔力を拳に1点集中させ一気に前に突き出し、放出する。
その名は

「——
フェンリス・ヴォルフ
神討つ拳狼の蒼槍——!!」

零二も先の戦闘で相手がある程度の魔力を無効化する能力なのは見抜いていた。ならば、そんなものができないほどの超強力で膨大な魔力をぶつけられただけのことなのだ。蒼き魔力の塊でできた槍は相手の存在を否定するために喰らいついた

「ふう、みたか、くそつたれ」

消滅した相手に向かって零二がそう呟いた時だった。

「そこまでです！」

声が聞こえた方を向くと、栗色の髪をし、赤い大きくまるい宝石が前に着いた杖を持ち、白い何かと言えばドレスに近い感じの服を身に着けた女性が…宙に浮いていた

「もう、驚かねえけど……なんつーか、なあ」

言葉に出ない気持ちの同意をサクラに尋ねたが

「うわあああ！とつてもかわいいんだよ！綺麗なんだよ！マスター
！」

とこんな感じであつた。

「時空管理局、機動6課フォワード、スターズ部隊隊長、高町なのは一等空尉です！あなた方にロストログアの所持についてなど、いくつかの質問があります。御同行願えますか？」

零二は少しだけ考える。こちらは圧倒的に不利な状況であり、なおかつ情報もまるでない。

「1つだけ聞きたい。俺の仲間には手を出さないか？」

「……お約束します」

「わかった。こっちも、情報が欲しい。」

そして紗雪と剣悟と合流した4人はへりに乗りこんだ。

SIDE・END

JAIL・SCAGLIETTI

「これが、君のいう戦略破壊魔術兵器、通称マホウか？」

明るみがあるが暗い施設。とある場所にあるここは彼、ジェイル・スカリエッティの研究施設である。

「ああそうさ。あのナイフと銃は間違いなくな。……だが」

その奥の影にいる男は映像に映った薄い桃色の少女、サクラに目を向ける

「……ロストログアの反応があったということは、これも……だが、信じられんな」

「では証明すればいいだけのことでしょ」

とあらたに別の男が出てくる。銀髪のセミロングをし、何世紀か前の騎士のような格好をしている青年だ。

「テュールかどうした？」

「その名前はやめろ」

テュールというのは彼のあだ名だが、彼はその名を付けた人物以外に呼ばれるのは嫌いなのである。

「それで、どうするんだ？『^{おれ}運』にでもまかすか？」

「貴様と違って、俺はギャンブラーではない。やつと戦う時に戦力を送り込めば、いやでも戦うさ」

「なら、次に彼らを見た時にでも行つさ」

スカリエツティは嬉しそうな顔でそう言う。

「ずいぶんいい顔してんじゃねーか」

「ああ、それはそうさ！こんなにも研究対象があり、そのやりがいがあるのだから！！」

テュールはうんざりそうに、影にいる男は苦笑をし、その不気味な笑みを見ていた。

霧崎VSスバル／神討つ拳狼の蒼槍（後書き）

今回出てきた神討つ拳狼の蒼槍、フェンリス・ヴォルフ本編で出たときはすげーかっこいいと思った！

ちなみに今回は零二は本気を出していません。

歓迎（前書き）

うゝん最近、昔見ていた特撮にはまった今日この頃。

当時はよく分かんなかった人物の言葉も今見ればよくわかる

金子監督の作ったカメラ3部作はすごい

………どうでもいつか、こんなことwww

歓迎

「で」

零二は眼の前の状況をじっと見ながら頭をかく

「いやあゝ会話が成立するまえに、ネタが成立する人がおんのは嬉しいわ」

「霧埼くんはおもろいなあゝホンマ気が合うわ」

「紗雪、私とティアの隣でしょ？あとでへやにきてよ」

「うん。サクラちゃんもいいかな」

「とうぜーん」

「ほわあーおいしんだよ」

「いっぱいあるから、急がなくてもいいよ」

「ありがとうなんだよ、なのはさん」

「どうしてこうなった？」

零二はそう思ったことを素直に口にしていた。

数時間前

零二達はへりに乗せられた後、簡単な質問をしていた

「それじゃ、ここは日本どころか、地球ですらないってことですか！？」

質問として零二は最初にここがどこかを聞いたが、自分の予想の斜め上に行く回答がでて驚いていた。

零二の目の前に座っている栗色の髪の女性、高町なのはと名乗る女性はこのミッドチルダと呼ばれる場所で、そしてここは零二が知っているマホウではない魔法の技術によって繁栄してきたということがわかった

「なんや、めちゃくちゃスケールのでかい話になってきたなあ」

「別世界。並行世界でもなく、そんな世界が本当にあるなんて」

剣悟と紗雪も驚いていたが、少しばかり落ち着いてきていた。

「まあ、名前からわかると思うけど、私も地球の出身だから。本部に戻った後、いくつか事情聴取が終わった後、帰れるから。たしか、月読島だったよね？いま探してくれてると思うから、安心して」

「そいつはありがたいですけど、でも……」

「わかってる。あなた達の持つてるロストログアも、事情を説明し

て取られないようにもするから」

「はい。というか、そのロストロ……うわゝかわいいんだよ」ギア……って、何してんだサクラ……！」

みるとサクラが桃色の髪の子、名前をキャロ・ル・ルシエ言う少女の膝の上にいる先程の竜のミニ状態をなでていた。

「えゝマスターやきもちゝ？」

「馬鹿言つてると、飯抜きするぞ。つか、そろそろその辺にしないと」

ガブリ。そんな音がここにいる全員に聞こえた気がした

「いだだだだだ……！」

寝ているところを撫でていて機嫌を損ねたか、そのチビ竜はサクラの手にかみついた。

「ちょ、フリード！だめだよ人を噛んじゃ……！」

「ていうか結構いたそうだったよ、今の……！」

「ちょっと、大丈夫なの……！」

「たしか、応急処置用の医療ケースがあつたはずですからそれで……！」

と、フォワード部隊の4人は先ほどまでの重い空気から一転し、随

分と慌てていた。

「たく、お前は動物に嫌われる体質なんだってことをいい加減学べ」

「うゝ、でも、これから仲良くなっていくなだよ!」

「はいはい」

「あははは…」

なのは達は苦笑いをし、ガジガジとまだフリードと呼ばれる竜は噛んでいた。

「はぁ……で、話は変わりますけど、ロストロギアって何ですか？それに、あなた方が使ってる能力はいつたい…」

「それは、今から合う人の所でまとめて教えてあげるよ」

となのはの隣に座る金髪のロングヘアをしたフェイトと名乗る女性が言った時だった。

「あゝ見て見て、マスター!!」

今度は何事かと思いサクラのしている窓の外へと向けると

「ここは未来都市か？」

そう言いたくなるほど光景だった。

もはやサクラを除いた3人は声が出ないほどである

「わたしも、最初こっぴどいものを見た時はおどいたなあ」

なのははそう言うが、今の3人の心境を変えることはできない。

「ははは、もう笑うしかないなあ」

「ここまで来ると、驚きも何もかもを超越してる」

「奇遇だな紗雪、俺もそう思ったところだ」

結局、目的地に着くまでサクラははしゃぎっぱなしで、零二たちは今の状況を理解するのに手一杯だった。

そして、目的地に着いたあと施設の中に入り、なのははとフェイトに部隊長室という場所に案内された。

ドアをノックすると中から「どうぞ」と女性の声が聞こえ、6人はその部屋に入る。

「失礼します、高町なのはは一等空尉、フェイト・テストロッサ・ハラオウン執務官、任務から帰還および、列車内部にいた次元漂流者と思われる民間人をお連れしました」

敬礼をしてなのははとフェイトは報告をする。そこには3つの影があり、正面に見える机の後ろに座っている女性とその両サイドにいるのは赤紫色の髪のパニーテールの女性と、キャロ達と同じくらいの歳に見える赤髪の女の子だった。

「ぐくろつさま。……はじめまして、機動6課部隊長、八神はやて二佐です。隣にいるのは、シグナムとヴィータでフォワードの副隊長」

「あ、どうも。芳野零二です。あなたがこの」

「そう、部隊長です」

「なんか、予想とちやうな」

と剣悟が言う。

「あ？じゃあ、お前どんな人を予想してたんだ？」

「きまつとるやないか芳やん！もっとこう、ひげ生やして、宇宙〇艦とかの指揮してそーな……」

「いや、な」

「なんでやねん！！」

なに言ってるんだ？と零二がツッコムよりも早くツッコミが出てきた。ま正面にいる八神はやてから、関西風に

「あ……………」

とおそらくこれが素なのだろうがそれを表に出す気はなかったのか、つい出してしまい赤くなる。

「おゝ姉さん、関西の人なんかゝ！はじめてみたわゝ」

「そ、そうなん？…でも君も」

「ああ、ワイはただあこがれてこついう口調になつとるだけや！いやゝ本物に会つのは初めてやから、ちよつと今になつて緊張してきたわゝ」

当然緊張などしていないが、嬉しいのは本当だった。

「主、口調が」

と左に立っているシグナムという赤紫色の髪の女性がただそうとする。

「おつと、んんっ！…それで「ばきゅん！」…ぐあー！」

剣悟が手を銃の形にしてはやてに向けそう言つと、はやては弾丸を喰らつたかのような演技をする。

「てめー！！今はやてになにしゃ「いやヴィータ演技やから！」つてえええ！」

反対側に立っていたヴィータと呼ばれる赤髪の女の子は一瞬本気にしたが、はやてがとめた。

「霧埼、なんだ今のは？」

たまらず、零二が聞く

「ああ、今は関西特有のあいさつや」

「あんな挨拶があんなら、俺は今すぐにでも日本人をやめてーよ」

「それは関西の人に対する侮辱やで！」

「そうや、あやまってや！」

「って、何であなたまでのってるんですか……ああもうわかりましたすいません！」

頭をかきながら零二は2人の関西人（一人はエセ）にあやまった。

「あのー、はやてちゃん…その、話がずれてきてるような気がする」

「あつ……そうやった、久々の本場のネタやったから体が条件反射で」

「どんな条件反射ですか！？つか、紗雪もサクラも笑うな！」

「ごめんなだよマスター。でも漫才みたいだったからつい……」

零二がはあ、と大きなため息をついたあとようやく本題に入った。

「それじゃ、本題にいくで」

（もう関西弁でいくのか…まあ、ツツコまないでおこう）

零二はそう思ったが今は聞くことに集中した。

「まず最初に、零二君やったな？君らが使ってたあの力について」

「それについては俺らも聞きたいことがあったんです。ロストロギアやら、あなた方の能力やら…色々」

「ほな、まずロストロギアから…次元空間内にはいくつもの世界があつて、その中に稀に進化しすぎた世界が存在すんやけど、たまに進化しすぎた科学や技術が自身の世界を滅ぼしてしまい、その失われた技術の遺産が残るときがある。それらを総称してロストロギアと呼ぶんや」

「なるほど、つまり滅んだ世界の大きな力を持ったもので、それ1つで世界の命運すら決められるものだってことですか？」

「そう。大抵は使用方法はわからないのが多いけど、それでも危険な者やつちゅーのは変わらんから、それを見つけて、しっかりと保管をする必要がある」

それを聞いた零二達はすぐに彼らの言うロストロギアが自分たちの能力だと気付いた。
マホウ

「なら、もう1つ。あなた方はマホ…いや、召喚せし者しゅいかんものですか？」

「？なんや、それ？召喚師のことか？」

「いえ。まあ、謎はまた増えましたけど、とりあず違つことが分かったんで俺達のことを話します」

（やっぱり、違つた…でも）

（おかしな点がひとつ残るなあ）

紗雪も剣悟もそのことを考えていた。

「俺達は戦略破壊魔術兵器、通称マハウと言われる兵器を操る、召喚せし者、通称マハウツカイと言われる者です」

「『戦略破壊……』」

「『魔術兵器？』」

「はい。過去に俺達は手のひらくらいの宝石を偶然拾い、それしていつの間にかそれは消え……いや、融合した。そして、自身に危険がせまったとき、その力を覚醒した。そして、自身の心象を具現化して、能力を持った兵器となる。おそらく、これがあなた方の言う口ストロギアです」

「にわかには信じられんけど……報告では数多くのナイフと2丁拳銃をもつとらしいけど……」

「それは、ワイの武器とさつつんの武器やな」

「そう。そして、この兵器を使う者は人類の科学では理解不能の超人となる。肉体はマハウが回復し、如何なる科学兵器を用いても殺せない」

「マハウは心象を具現化するから、形は色々あるし、複数あるようにも見えるけど結局は1人につき1つ。そして、マハウは例外を除いてどんな兵器であろうとも破壊できないんだよ」

「例外？それはなんだ？」

シグナムが聞く。

「大いなる力を持ったマホウは、同じくマホウによってのみ破壊できる」

「つまり、まとめるとこういうことかな」

はやてはメモに書いたことを見直す

マホウツカイ

召喚せし者は、現在の如何なる科学兵器を用いても殺せず、時ととも回復する。

*

マホウもいかなる化学兵器でも破壊できず、マホウでしか破壊できない。

マホウはその人物の心象を兵器として具現化した形となる。

具現化したマホウ兵器には、独自の特殊な能力が備わる。

マホウツカイ

これらゆえにマホウは、一人の召喚せし者つき一種類まで。

*

「ん？ちょっとおかしくねーか？」

とヴィータは手に持った情報端末を見ながらいう。

「これがほんとだとすんなら、マホウはマホウでしか破壊できねーんだろ？でも報告書では、スバルがいくつか破壊したというのが入ってんぞ？」

そう、剣悟の武器は完全ではないがいくつか破壊された。

「それについては、わからない。サクラでも完全にはわからないから、俺達にはさっぱりだ」

「って、何でサクラちゃん…だっけ？どうしてそんなことがわかるの？」

「ああ、それなら簡単ですよ」

フェイトの質問に零二は答える。

「サクラは、俺が呼びだした人型の戦略破壊魔術兵器なんです」

「………！？」

この時、零二達以外は全員驚いていた。生きたロストロギア魔術兵器を見たのだから当然ともいえるが。

「で、兵器としての補助装備の中にあいてのマホウ能力を瞬時に見抜いて記憶する能力があるんです。ちなみにその情報はマスターである俺も見ることができます」

「驚きの連続だけど、とりあえずそれはわからないんだ……私達の使っている魔法は、超科学と言った方がいいかもしれないかな。魔力を使って発動される現象。そして魔導師が魔法の使用の補助として用いる機械が、デバイス。この中には、バリアジャケットや武装、シールドや攻撃の魔法の情報がインプットされてるの」

と、なのはが赤く小さな丸い宝石を出す。サクラはじっとそれを見る

「わつ、すごいんだよこれ！言葉で表すんだつたら、^{レプリ}擬似型戦略破壊魔術兵器なんだよ」
カマホウ

「^{レプリカマホウ}れ、擬似型戦略破壊魔術兵器つて、そんなのありえんのかよ！？」
冷静になるうにも、召喚せし者としての常識がそれをさせていなかった。

「うん。けど、あくまでも模造品にすぎないんだよ。一定の力以上はでないし、マホウ本来の機能の2割か3割位の力しかないんだよ」
…」

「しかし、マホウには変わらないため、デバイスによる破壊に成功した。そういうことか？」

とシグナムが聞く

「うん。でもこんなの普通はできないはずなんだよ」

「まあ、そこはあれや、^{ルール}世界が違っからっちゅー奴やな」

剣悟もおちゃらけているが、内面では事実をまだ信じられずにいた。

「しかし、そのマホウとは外すことはできないのか？」

とシグナムが聞く。

「一度融合したマホウは、人間の意志じゃどうすることもできませんし、宿主を変えることもないです。それに…たとえばきたとしても、俺は手放すつもりはありません。サクラは、俺の大切なパート

ナーであり、家族です」

「マスター……」

零二はいつも以上に真剣な顔付きで答えた。

「ワイも、自分自信の心象を捨てるなんてのはできひんな」

「右に同じく」

心象を捨てるということは、自分の生き方、生き様、その過程で生まれた自身の想い。それらすべてを捨てる。すなわち、自分を捨てると言っほかないのだ。

「家族、か……」

どこ昔を懐かしむようにはやては呟いた。

「わかった、今回のロストログアに関しては不問にすると誓うから、安心してな」

「いいのかよ？はやて」

ヴィータは職務上として聞く。

「ヴィータやったら、どないしてた？」

「む！………そんなもん、聞くまでもねーだろ」

頬をお赤らめてそう言っの見たなのはとフェイトに笑みをだす。

「ほんと、ありがとうございます！」

「ええって。それじゃ、そろそろ……」

と、その先を言う前にドアをノックする音が聞こえる。

「ちょうどええ所やったな。どうぞ」

このとき、皆が安堵していた。

「失礼します!!」

「はやてちゃん、大変です!!」

「……妖精？」

と入って来たのは眼鏡をかけた女性と、物語に出てくる妖精サイズの女の子

「妖精じゃないです！リインにはリインフォースツヴァイという名が……」

「リイン曹長そんな場合じゃありません!!」

「っとそうでした！」

そう、この2人が入ってくるまでは安堵していた

「見つからなかった!？」

はやては入ってきた女性、シャリオ・フィニーノことシャーリーが伝えた情報に驚愕した声と表情で聞く。

そう、零二達の住む月読島が見つからなかったのだ。

「もう1つの、旧名の方でも見つからなかったんですか？」

「継黄泉の島でしたね？それもまったく……」

リンフォオースツヴァイことリンが質問に答えた

「どういうことなの？私達の世界の人なら絶対にあるはずだよ」

なのは達も焦り出してくる。

「そういえば聞いとらんかったけど、ここに来れた理由はなんなん？」

「えっと、確か……」

零二はなるべく冷静に事の発端を話した

「空に穴……その大きさは、わかる？」

「いい表すのは難しいですけど、大空の1点だけに穴が開いていました」

「物で表すと、大きな紙に、ペンで穴をあけたほどだと思います」

紗雪が零二の後に続いて話すとはやて達は考え込むようなしぐさをした。

「シャーリー、次元震の反応は？」

「いえ、まったく……！まさか」

そこではっ、とする。それに気付いたのだ。そしてなのはが告げる

「……芳乃君、落ち着いて聞いてほしいんだけど、おそらく、あなた方と私達がいた地球は、似て非なる世界。それも時空管理局がつかんでない場所に存在する」

「それって！」

「うん……ごめんなさい。約束をいきなり破ることになってしまった」

つまりは零二達の世界で中規模の次元震と言うのによってできた次元の裂け目に吸い込まれ並行世界でもなく、別次元の世界のどこから迷い込んでしまった。そしてその場所もどこかはわからない。

「最悪の状況やな」

「つまり、俺達はもう帰れないんですか！？」

「ううん。そんなことはさせへん！」

はやては大きな声を出して否定する

「約束したんやから、それは絶対に守るそう決めたんや。せやから、ロストギアが絡んでるから公にはできへんけど、何が何でも絶対に見つけてみせる。」

「!」

その時零二は気付いた彼女が【決断】しているのだと。

「でもどうすればいいんですか？それまではこっちの世界にいますということですし…」

「それなんだけど……どうかな？6課でフォワードで働いてみない？」

「もちろん、強制はしないよ。あなたが決めてくれていいから。断っても出て行けとも言わないし。けど、これでこの世界で動きやすくなると思うよ」

とフェイトとなのはが提案する

「いきなり会ったばかりで信用すると言われてたらNOやけど、まあそれしか道はなさそうやし。それに黙って何もせんのはしょうに合わんからな。ワイはええで」

「私は、少なくとも私達を元の世界に返すといった真剣な眼差しと言葉を信じたい。けど、兄さんがどうかで後は決める」

「私も、マスターの意見に賛成するんだよ」

剣悟を除いた2人は零二の答えを待つ。そしてその零二は少し悩んで言った

「八神さん。いくつか問いますがいいですか？」

「聞かれる内容はだいたい分かるし、理解しとるからかまへんよ」

「ありがとうございます。なら、1つ目にあなた方は俺達を利用するということですか？」

といきなり警戒してますよと言いたげな質問をする。

「どんなに取り繕ったことを言っても、結局それには変わりはないから、そう思ってくれてもかまんよ」

「！じゃあ、次にあなたは、俺達に危害を加えるつもりはないんですね」

それを否定せず、かと言って肯定とも言い難い答えが返ってきて零二は少々驚くがすぐに次の質問に移った

「ない」

「なら最後に、俺達との約束を絶対に守るそれがあなたの決断なんですね？」

「そうや。これだけは絶対に覆らん。私の決断や」

「（この人も決断している。おそらくこれ以外にも何か）わかりました。あなたのその言葉を信じます」

零二は人を見る目はある。故にここで彼女を信じる選択を取った。

「ただし、俺達に嘘はついたり、俺達の道を阻む要因になるのなら、その時は……」

「……わかつとるよ。迷惑はかけん。万が一の時は私が全部引き受ける」

「なっ！」

その自己犠牲ともいえる考えを聞いて零二は確信する。この人が想像以上に重いものを背負っていると。

「わかりました。俺達もできる限りあなた方に協力します」

「ありがとうな。改めてよろしく芳乃君」

「はい」

「んじゃ、ワイらも自己紹介せなあかな芳やん」

「それやったら……」

その後食堂に隊舎にある食堂に案内された零二達の前には本日あったフォワードメンバーを含めた6課のスタッフ達が並んでいた。

「自己紹介なら、一緒に戦うメンバーの顔を覚えとかんといかんし、何より一緒に生活するんやったらなおさらや」

「そつすね…芳野零二です。短い間にあるかもしれませんが、皆さんと協力することになった民間協力者です。よろしくお願いします」

「黒羽紗雪です。兄さんとは、血の繋がりはありませんけど大切な兄です。兄ともども、よろしくお願いします」

紗雪が零二を見て義妹だと告げる。

「霧崎剣悟や！まつ、よろしゅーたのむで」

「マスターであるレイジの剣であり、盾のサクラなんだよ！」

剣悟とサクラも楽しそうに自己紹介をすると、各所から拍手があがる。

そして現在

部屋の場合などの説明を受けた後、ちょっとした歓迎のパーティーが開かれたのだ。

「えっと、エリオだったな。お前みたいな常識人がいると、こつちも助かる」

と零二は先ほど自己紹介をしてもらったフォワードの赤髪の男の子、エリオ・モンデュアルと話していた。

「はあ、零二さんもなんだか大変そうですね」

と同意する。

「つか、キャラだっけ？あいつもお前も、よくその歳で戦いに出てるよな。自分の意思か？」

「はい。昔、色々あって、フェイトさんに助けてもらってそのお礼に。フェイトさんを助けたいと、そう思ってた」

「ふーん。そいつがお前らの決断なら、俺はないもいわねえよ」

「決断？」

「ああ。エリオ、1ついつとくぜ。守りたい大切なものがあるなら、【決断】するんだ。他人から見れば滑稽でも、その大切な1を守るために、全てを犠牲にしても守り抜く決断。捨て身じゃなく、生き残って守り抜くっていうな」

エリオは黙って聞いていたが、最後にしっかりと「はい！」と言って笑った。

「マスター！！これおいしいんだよー！」

「たつく！少しは遠慮しろってんだ」

そしてこの日の夜は去っていく。

だが彼らは知らない。この事件が思いもよらない方向へ進んでいく

ことなど...まだ、だれも...

歓迎（後書き）

という訳で4話目です。

やっぱ霧埼とはやてはからませるべきかと思いあんな感じにWWW

そんでもってデバイスの設定を少しオリジナルにしてみた。

レプリカマホウ
擬似型戦略破壊魔術兵器。

反論や意見がありましたら、感想によろっす！

ちなみにそのうち、スバル達のバトルステータスも出します。

朝食風景／訓練・紗雪編（前）（前書き）

どうも

ようやく掛けたけど途中で終わってRU・WW

朝食風景／訓練・紗雪編（前）

まどろみの朝、目覚ましの音を聞いた零二は目が覚めるとそこは見え覚えのない部屋だった。

「……そうか、俺達は」

昨日の記憶がゆっくりと思いだしていく。

「夢、じゃねーんだな」

現実を受け入れ着替えを始める。それは自分が来ていた私服ではなく、ここ機動6課の隊員の服だ。

はやてから部屋のカギをもらった時に一緒に渡されたもので、民間の協力者でも零二達は仮にもこの世界で危険なものであるロストロギア、戦^{マホウ}略破壊魔術兵器を使用している。おそらくその使用許可を取るのにはやてが苦労したのは零二にもよくわかる。

（だから、俺達がこの服を着てここにいることで、言い方は悪いが味方として分類するってわけか）

しかし、これでも許可をしてここに置いてくれてるだけでも零二達にとっては感謝してもしきれないのだ

「さて、食堂にでも行くか」

「おっ、芳やんも今起きたんか？」

着替え終わり、部屋を出ると剣悟がいた。ちなみに剣悟の部屋は隣にある。本来2人1部屋なのだが、紗雪の「この人が兄さんと一緒にいると何をしでかすか分からない」という一言で別の部屋になった。

「まったく、せっかく芳やんと夜のエロトークでもしようかと思つたとのに」

「そう愚痴るなよ。わざわざ部屋を用意してくれたんだから」

「まあ、せやな。んじゃ、食堂行くんやろ？サクラちゃん達も行くやろうから、ワイらもはよ行こうか？」

「だな。サクラのことだ山盛りに食ってんだろーな」

「で、他の人らが啞然とする。もう目に見えとるなあ」

食堂

「「そんなふうに通つてた時期もありました」」

「あ、マスター朝ごはんの用意できてるよー!!」

いつもならここで「お前が作ったみたいに通うな」と零二がツッコムところだが、それよりも零二と剣悟が眼はとある一点に集中していた。

「あ、芳乃さん。おはようございます」

大量のサラダが置かれたお皿を片手に声をかけてきたのはスバルだった。

「あ、兄さん……」

紗雪もどこか困惑したような顔で零二達を迎える。だがそれよりも眼が行くのはテーブルの中央に置かれた大きなボウルに入った山盛りのサラダだった。少なくとも6人前以上はある。

「あ、ああ。つか、よく食うなお前ら……」

そう零二が指したのはサクラだけではなく、昨日出会ったフォワードの4人もだった。特にエリオやキヤロは10歳とは思えないほどの量を既に食べているのにそれでもまだ口に食べ物が消えていく。さらにスバルにいたっては皿からこぼれ落ちそうなくらいの量を入れている。

「え、そうですか？」

とさも当たり前のことを聞いたのに逆にそうきかれるとは思わなかったのか零二は頭をかく。

「まあ、確かにそう思うのは仕方がないかもしれませんが、それに、訓練がハードですからその分おながが空きやすんですよ」

と返したのはオレンジ髪のスインテールのティアナだった。

「訓練？そっぴや、俺らも今日の昼前くらいからやるんだっぴやな？」

零二達は初めてということ、初日は昼ごろと午後の訓練だけということを言われたのを思い出す。

「うん。朝見てきたけど、かなりハードだった」

「朝って、お前早起きして見てたのか？」

零二は紗雪が言ったことに対して質問をした。

「ううん。自主トレーニングがてらで」

「あああ、なるほど」

と納得していると、スバルが反応する。

「あ、紗雪見てたんだ！」

「うん。勝手にごめんなさい」

「気にすることないわよ紗雪。これから一緒に訓練だってするんだから」

「うん。ありがとうティア」

最初は紗雪の方が年上ということとさん付けだつというのに既に呼び捨てでしかもあだ名もいい合うほどにここの関係は良好だった。

「うーん！でりーしゃすなんだよ！」

「でお前は何もしてない癖によく入るな！」

「マスターも霧崎君も、早く食べた方がいいんだよー！」

サクラは幸せそうに食べていた。

「ったく。まあここでじっとしてるのもなんだし、さっさと食うか」

「せやな」

ちなみにサクラがロストロギアの戦略破壊魔術兵器であることはすでに説明済みであるが

「あ、サクラちゃんほっぺにパン屑がついてるよ」

「あ、ありがとうなんだよスバルちゃん！」

「なにかしらねーこのなんだか守ってあげたい感」

「むー！子供扱いしないでほしいんだよティアちゃん」

このように全員普通に接している。

「（つか、こいつはいつも通るか）バーカ。お前は充分子供だろーが」

「あー！マスターひどいんだよー！ねー」

といって近くにいるミニ状態の竜フリードに手を出して話しかけるが

「あだだだだだー！！！！」

案の定噛みつかれた。

「ったく。すまんキャロ、助けてやってくれ」

「あ、はい！」

その後も何度か噛みつかれサクラがしくしく泣いていたのは言うまでもない。

そして、昼前の訓練があるということで零二達は訓練場に案内されて来た。が、

「って、ここ何もないじゃないですか！？」

「まあ、広い所やけど周りに海が見えるだけで、ほんまに何にもないフィールドやなあ」

そこには広い金属プレートが繋がったフィールドが海に接しているが、それ以外には障害物や的のものもない場所だった。

「そういえば、紗雪はみたんだよね？ここで訓練してるの」

「うん。でも兄さん達が思ってるよりここはすごい」

「まあ、見てたらわかるよ。シャーリー」

「了解しました」

紗雪のその言葉の意味を零二が聞く前になのはがシャーリーに合図を出す。その直後、視界に映るものは変貌した。

「なっ！」

「こらすごいなあ！」

今彼らの目の前には廃ビルが立っている。それも1つではない。いや、もはや1つの町と言っていていくらい廃ビルが彼らの周りに並び立っている。

「立体映像……じゃない！ちゃんと触れられる！」

「どう言う原理なんや！？」

「実体を持った映像とでも言うべきかな。ここでフォワードの皆は訓練をしてるの」

なのはが説明をするが、あらためて零二達は自分たちの世界の技術の違いを実感するのだった。

「それじゃ、スターズとライトニングは少しだけ見学。芳乃君たちは、まずポジションを決めたいから、かく能力のチェックと戦闘訓練をつて、そういえばサクラちゃんは？」

なのはは、サクラがないことに気付き、マスターである零二に尋ねた。

「ああ、あいつならたぶん今頃……」

SIDE・END

SAKURA

「ほへへ〜なんだよ〜」

零二の思った通りサクラは日のよく当たるベンチに座り、のほほほ〜んとしていた。

「つてあり、おめーサクラじゃねーか」

「あ〜ヴァイス君。こんにちわなんだよ〜」

サクラは先日自己紹介をしたヘリパイロットのヴァイスにあいさつをする。

「ああ、こんにち……じゃなくて！お前、なにやってんだ？」

「見ての通り、日向ぼっこなんだよ〜」

「いや見りゃわかる！俺が言いたいのは、こんな所であぶらを売っていいのかってことだ。いまなのはさんが、お前のマスターである零二達の訓練を見てくれてんだぞ」

「大丈夫。それに私は、日光を魔力に変換することができるから、戦闘時になるべく万全に戦えるようにこつやってエネルギーをチャージしてるんだよ。だから、日向ぼっこは私のらいふわ〜なんだよ〜」

「そう聞くとすり替えのようにも聞こえるぞ。つか、お前ほんとにロストログリア兵器なのか？たまに疑いたくなる」

「兵器だけど、ちゃんとした女の子なんだよ！シャーリーさんだつて言つてたし」

サクラはここに来た日に零二の許可を取り身体検査を行ったその結果は驚きのもで、

「検査結果では、たしか『魔力が高いがそれ以外は普通の女性と変わらない』だったな？けどロストログリアの反応はある…ほんと不思議だよな」

「うん…あ！」

「どうした？」

「今日シャーリーさんが用があるつて言つてたような……まあ、もう少し日向ぼっこしてか……ZZZZZZ」

「寝るのかよ！」

もうこれは起きないパターンだなとこの時ヴァイスは確信した。

「まあ、俺は訓練場の方に行くから、お前もなるべく早く来いよ」

「は…いなんだよ」

やれやれと言つた感じでヴァイスはその場を去つた。

SIDE・END

REIZI・YOSINO

「あははは、日向ぼつことは思わなかったなあ」

なのはがそう言つと他のメンバーも苦笑していた。

「すいません。けどまあ、あいつが万全に戦うには必要不可欠なことですから。というより、あいつはたぶん言つてもやらないと思います」

実際零二はサクラが新婚さんごつこと言うものをやってきたとき「ごはんにする、おふろにする、それとも私？」と言う質問に零二は私を選んだ。ちなみにそちの意味ではなく、兵器パートナーと言つ意味で言つて、修行をしようとしたが

「柱にしがみついて泣きながら暴れたんで、結局あきらめたんですよ」

（芳やんは変な所で鈍いなあゝいや、わざとか？）

（（（（芳乃さんって、意外と鈍感？））））

（兄さんらしいな）

零二の答えに皆色々と考えるが、とりあえず今は置いておくことにした。

「まあ、ともかく始めましょうか？」

「そうだね。それじゃあ、紗雪と霧埼くんはまず武装を展開して」

「はい——
ゲイト・オープン
魔術兵装——」

「了解——
ゲイト・オープン
魔術兵装——」

2人は互いの武器を展開する

「いつ見ても、霧埼くんの武器はなんかすごいよねー」

スバルは初めて見た時からの感想を素直にいう。

「霧埼くんの能力は、生物以外の物質を自由にコントロールするんだったよね？」

「そうやけど、このストリームフィールドをコントロールすんのだけで手一杯やから、他の物を動かすのは事実上無理なんやけどな」

「紗雪の力はまだわかってねーから、とりあえず戦闘訓練でもすつか？」

「うん。わかった」

とヴィータにいうが

「おいお前ら、一応あたしが年上だってこと理解してんのか？」

「……えっ！？」「」

そう。一見すればヴィータは子供に見えるような体格だが、その年齢は零二達を遥かに超える年齢である。

「いやまあ、そいつはすいませんでした」

「ごめんなさい」

「あれ、随分とあっさりと返すね」

フェイトの疑問はもっともだが零二達も似たような人（母である）を知っているのですぐに返せたのだ。

「ともかく、紗雪ちゃん以外は皆ビルの上で観戦するよ」

なのはに案内され、見晴らしのいい位置に上った。既に紗雪の周りには複数の模擬戦専用のガジェットがいる。その数は5機

「紗雪ちゃんの武装を見る限りだと、狙撃型かな」

「だとしたら、ティアナやなのはと同じポジションだね」

となのは達は考えたがすぐにそれは覆された。なぜなら狙撃型の行わない行動を紗雪がとったのだから

「動いて、攻撃を？」

SIDE・END

SAYUKI・KUROBANE

初撃の攻撃を難なくかわし、攻撃を仕掛ける。魔力を込めた弾丸は

魔力を消し去るガジェット的能力AMF通称アンチマギングフィールドを考慮したものだ。

「まずは1機」

紗雪は連射せず、わざと敵を逃がす。紗雪は前回の戦闘でこの機械はある程度の魔力を消し去ってしまう力があることがわかり、魔力を十分に装填し撃てば破壊できることも分かった。だがそれは紗雪のバトルスタイルにはあわない。

ガジェットの1機が仕掛けてくると残りの3機も徐々に攻撃をしてくる。

「ふっ！これで！！」

魔力を多少チャージして放つが量が足りず四散する。

「！やっかいきわまりない」

たしかに十分に装填すればどうということはない相手だが、紗雪の魔力総量は決して多くない。故に紗雪は長い期間をかけ、いかに魔力を消費せずに敵を倒すかというものへとたどり着いた。紗雪の最も得意とするのは射撃ではない。狙い撃ちをするために止まる必要はないからだ。

ヴァイス・シュヴァルツ
《福音の魔弾》

この能力があるかぎり紗雪の弾丸は確実に相手に当たるのだから。故に、紗雪が磨き上げてきたのは射撃ではなく、スピードによる回避と持続力をつかった持久戦こそが紗雪の真骨頂のバトルスタイル

である。

「これで！」

だがこの敵は紗雪のように魔力でできた攻撃をし、なおかつ威力が弱ければそのすべてが無力化となる。前回は小型のため勝てたものの、大型相手では紗雪は勝てる気がしていなかった。なぜならこの兵器は紗雪のようなタイプにとっては天敵中の天敵なのだから。

だからこそ、紗雪はこの訓練でどれだけおさえながら戦って、もつかをいま実験をしながら戦っていた。

「——
ヴァイス・シュヴァルツ
福音の魔弾——！」

白と黒の2つの弾丸はクロスを描いて2機に向かう。だがこれも魔力不足で四散してしまう。

「ッ！！（かこまれた）」

いつの間にか数が増えた敵に囲まれて一斉攻撃を受ける。全方位からのレーザー攻撃。常人の人間にこれを避ける手段など存在しない。

「——
フリーゲル・ブリッツ
瞬間魔力換装——」

そのとき、紗雪は音速を超越し、光速をも軽々と越えた。

朝食風景／訓練・紗雪編（前）（後書き）

はい、今回出たようにサクラは（魔力は高いがそれ以外普通の女性と変わらない）という結果を出しました。

そして、さらにシャーリーがサクラを呼んだ理由とは……

次回、霧埼とあの人が戦います！！

訓練・紗雪編（後）／霧埼VSシゲナム（前書き）

予定より早く投稿できました。

テストも終わってバン万歳です↑表現ふるっ！WWW
でも今度は実習だ…OTL

訓練・紗雪編（後）／霧埼VSシゲナム

REIZI YOSINO

「ほんとうに、数を増やしてもいいの？」

「はい。あいつなら大丈夫です」

なのはの質問に零二は答える。

「正直、あの戦い方は武器の形状からして、間違ってるよ。それなのに止めずに、なおかつ続けるなんて……」

「ああ。あんな動いていちや、狙えるもんも狙えねえ」

「いえ、あれでいいんです」

零二達には紗雪があのがジェットに対抗するための実験を行っていることは一目瞭然であったが、なのは達は自分たちの知っているタイプの戦いをしているようにしか見えなかった。だからこそ、それを証明し、かつ紗雪の向上にもなる作戦とし、零二はこの手を考えた。

「包囲完了。ガジェット全機、攻撃開始」

シャーリーが指示したと同時にぜん14機から、擬似レーザーが放たれる。土煙でその1点が覆われている

煙が晴れた場所には……何もなく、いつの間にか紗雪が敵の1機の真後ろに回り込んでいた。そしてゼロ距離から攻撃を連射して撃つ。

さすがにゼロ距離攻撃にはいきなりは対処できず、破壊された。

「あれは……シャーリー！映像をこっちにまわして。スローで」

「は、はい！」

シャーリーは素早く手を動かし、モニターをなのは達の前に出す。だがそこにはいきなり紗雪が消える映像しかない。

「スローで捉えきれてない！？…コマ送りで！それで見えないようなら、少しずつ遅くして」

「りよ、了解しました！」

シャーリーは慌てて作業をする。なのはもちろん、フォワードメンバー、そして何より一番驚いていたのはおそらく現段階で6課最速のフェイトだった。

（コマ送りでも見えないなんて！……あのスピードはあり得ない。人の身体である限り、あの動きは普通はできない）

その疑問に答えるように零二は言う

「あれが紗雪の特殊技能 《瞬間魔力換装》フリーゲル・ブリッツです」

「フリーゲル、ブリッツ？」

「はい。自らの魔力を消費して、全ての身体能力を上昇させる。そのスピードは光速を超えた、神速のスピードに達します。どれだけスローで見ても、とらえられない速さです」

『し、神速う！？』

さすがにその予想もできないスピードに全員が驚く。

「けど、武器の形状からして、スピードをいかした形じゃ……」

「それは大丈夫です。さっき紗雪が射撃型って言ってましたけど、紗雪は狙う必要はありません。その証拠に、紗雪はあんなに動いてるのに1発も外していませんよって、もう終わりかけですね」

そう言われてみると既に紗雪は先ほど同じように敵を倒していた

SIDE・END

SAYUKI KUROBANE

敵が増えて動じることもなく、紗雪は瞬間^{フリーユル・ブリッツ}魔力換装を使い一瞬にして後ろに回り込む。

「これなら！！」

そして移動の前にチャージした魔力をゼロ距離で発射した。弾丸は貫通し爆発が起ころが、それに巻き込まれる前にまたも神速の速さで距離をとる。

（これだ！）

紗雪は偶然ともいえるが、対ガジェット専用の戦い形を取得した。

Dive&Zoom。またの名を一撃離脱戦法。

フリーゲル・ブリッツ
瞬間魔力換装を細かく連続して使い、敵の背後の周り一撃、そして素早く回避。

フリーゲル・ブリッツ
瞬間魔力換装は長時間の換装も可能だが、それはあくまでも机上の空論にすぎない。実際は魔力消費が激しすぎるので事実上不可能であり、できたとしても実用的ではない。

ゆえに、紗雪は1秒にもみたくない時間で換装と解除を連続して行い、攻撃しては回避という神業的な芸当を行った。

（けど、おかしい。いくらなんでも、ここまでうまくいくなんて）

だがそれを行っている本人もこの現象には不可解な点を覚えた。換装と解除を交互にやっているとはいえ、それはほぼ長時間換装をしているのに限りなく近い。実際に自分の世界でこのようなことは似たようなことはできても、ここまで完璧にはいかないだろう。そのくらい完璧すぎたのだ。

（とりあえず考えるのはあと……残り、3機！）

そして次々と破壊されていく。AMFの濃度が高めようとする前に……いや、敵も何が何だかわからないうちにやられるので打つ手がない。そしてついに最後の1機に

「——
福音の魔弾——！」
ヴァイス・シュヴァルツ

充分魔力をチャージしたとどめの一撃がクロスを描いて命中した。

「ふう……まだまだ、改善の余地がある」

自分に自惚れず、紗雪はさらに高見を目指す決意を改めて誓った。

SIDE・END

REIZI YOSINO

「す、すごい」

そう呟いたのはティアナだけであつたが、他のメンバーもだいたい同じ考えだというのが顔を見ればわかる。

この戦術は紗雪の長年の戦闘経験と修練の結晶とも言える戦闘スタイルをアレンジした新たな戦い方。これこそが黒羽紗雪の真骨頂である。

「さっきも言いましたけど、紗雪は狙い撃ちするために止まる必要はありません。なぜなら、あれこそが紗雪の能力《福音の魔弾》ヴァイス・シュヴァルツです。あれを避けるには音を完全に停止する以外、方法はありません」

「お、音を完全に消すって……………」

フェイトが全員の気持ちを代弁するかのよう呟く。音を完全に停止する。それは相手が生物であろうと機械であろうとも動かずともわずかな振動音から、体内のごくわずかな音と様々ある。それらすべてを停止させるとは、すなわち死を表す。死ぬまで追い続ける弾丸とはまさにこのこと。故に紗雪の攻撃は絶対に当たるのだ。

「芳乃君の説明と、この戦いぶりを見る限り、紗雪ちゃんは確かに私やティアナのポジションじゃ合わないね。どちらかというと、フェイト隊長やエリオのポジションがあつてるかも」

「うん。あのスピードは正直私の最速よりも速いと思うし、なにより格闘戦も強いみたいだし、十分に生かせるポジションがあると思えばそれだと思う」

「って、紗雪が格闘戦が強いなんて言ってもいなのになにどうしてわかるんですか？」

「これでもフォワードの隊長だからね。それに、弾丸よりもあれだけ速いのなら、技術を究めようとするのは誰でも思うことだし、理にかなってるからね。そして、弾丸は狙う必要がないなら、鍛えるべきは遠距離攻撃でなく、その弱点ともいえる近接戦闘。こう考えていけば、すぐに答えなんて出るよ」

「……………」

零二は心の奥底ではもしかすると、彼女たちを甘く見ていたところがあったのかもしれない。こちらは神に近い能力を持った《召喚せし者》。彼女たちは《魔法使い》とはいえ普通の人間さという考えが。

だが、ここまでの洞察力と観察力をもっており、相手のことを冷静に分析できるのはそうはいない。それに、零二は彼女たちの実力はかなりあると、今日までで気付いていた。おそらく召喚せし者である零二でも苦戦を強いられるであろうことも。

「正直、ちょっとだけなめてました。あなた達は並大抵の人じゃないのはよくわかりました」

「ああ、その点いたってはワイもや」

「あ、別にそこまで謝らなくてもいいよ……」

少し恥ずかしそうにフェイトは言った。

「さて、それじゃあ紗雪ちゃん的能力と実力はわかったし、次は霧埼くんだね」

「お、ワイの出番か？ええで。ワイの相手も、さっつんとおんなじやつなんか？」

霧埼はどこかつまらなさそうに言う。その理由はただ1つ。彼は、ガジェットと戦うのに飽きていた。

「まあ、そうなるか「いや、私が直に相手になろう」なって、し、シグナム副隊長！？」

いつの間にそこにいたのか、騎士の姿をしたシグナムがそこにいる。腰には彼女のデバイス、レヴァンティンがある。

「召喚せし者とやらの力、今見たが凄まじい。一度戦いたくなった」

（なんやろ、どっかで見たことあるようなタイプやな）

「でも、そうなるって怪我しますよ。いや、怪我だけじゃすまないかもしれないです」

「安心しろ。われわれの使うデバイスには非殺傷設定というものがついていてな。ダメージはあるだろうが怪我する程度でもない。それに、お前たちの武器をすっかり完全に破壊もしないようにしながら

ら戦うことくらいはできる。」

「いや、それも凄いですけどそうじゃなくて、俺達にはそんな便利機能は付いてません。そう言う意味で危ないっていつてゐるんです」

召喚せし者との戦いでただで済むはずなど100%ありえない。今まで戦い抜いてきた零二にはそれがよくわかる。自分はすべてに打ち勝ってきた。だからこそ言えるのだ。

「ああ、安心しろ。私はそう簡単にやられはせん。いや、むしろ勝てるだろうな」

「（カチン）ほーいうなゝ姉ちゃん。いつとくけど、ワイはこう見えても人智を超えた力を持った召喚せし者やで？」

「能力を持った者が勝てる道理などどこにもない。なにより、それはお前の世界の話であって、ここでは関係ない」

「（誰かに似とるかと思っただけど、鋼んと似たところがあるな。おもにバトルマニアなところが）ええで。そこまで言っんやったらワイもやったるで」

霧崎は一見すれば細身のようでへらへらしているが島では喧嘩負けなしと言われている。とういより、ここまで挑発されて動けるのに動かないのは霧崎のプライドが許さなかった。

「お、おい霧崎？」

「芳やん。悪いんやけど今回はかしはワイは止められへんで」

「き、霧崎くん落ち着いて。し、シグナムもその辺で……」

「どうしたんや？ビビッて声も出んか？」

「火に油を注いだ！！」

必死に止めようとするフェイトだったが霧崎のこの一言で、もはや回避はできなくなった

「ふっ、その気合い、無駄にならないようにな」

「はっ、上等や！そっちもその余裕がいつまで続くか見ものや」

「あーあ。これはもう止めれそうにねーな」

「「言ってないで止めてよ芳乃君〜！」」

そんな隊長2人の言葉を半分無視して零二は下にいる紗雪呼び、シグナムと霧崎は下に向かった。

SIDE・END

KENNGO KIRISAKI

「さて、始めるか」

バリアジャケットを装備したシグナムが剣を構えて宙に浮く。

「んーそうやって空飛ぶんは反則やおもんやけど？」

「お前だって、私達にはない反則ふきを使っているのだ。どちらにもハ

ンデは必要だろ？」

「はっ！ワイにそんなハンデなんてないにも等しいんやけどな！！」

霧崎は武器を攻撃態勢にしていつでも動ける。対するシグナムもいつでも360°。どの方向からの攻撃にも対処して反撃する準備はできていた。

はあ、えーと……どうしてこうなったかはわかりませんがともかく、危険だと判断したらすぐに全員で止めます。それでは……試合、開始！！

もうどこかやけくそ気味になのはが試合開始の合図を出した。

それと同時に先制攻撃を仕掛けたのは霧崎だった。

「エイレナイオス
踊り狂う悪魔！！」

上下左右にまばらにナイフが散らばっていき、一斉に挟撃を仕掛ける。

「こんぐらいでは驚きもせんし、対処できるんやろ？」

ふと口にした言葉はすぐに現実となる。

「ああ……レヴァンティン」

シグナムが自分の武器に命令をすると葉莖がつかの部分から飛び出す。

「シュランゲフォーム!!」

すると剣は分散し鞭のように操り、飛んでくるナイフをすべて弾き返す。連結剣と呼ばれるこの武器は霧崎のような攻撃を仕掛けてきたものに対しては効果的に防衛ができる。

「ひゅー。まさかそないな武器とは思わなかったで」

「そうか。なら今度は……こっちの番だな!」

「なっ!やばい!!」

いつの間にか真横まで接近され炎をおびた剣が振り下ろされる。

「紫電、一閃!!」

火炎と斬撃の攻撃によって爆発が起こる。爆煙が消えた先にあったのは

「ふっーいつつつ!!危なかったわ」

吹っ飛ばされてはいたがそこまでダメージを受けていない霧崎の姿だった。シグナムはほんの一瞬驚いたがすぐに冷静になりその理由を見つけた。見ると、ナイフの数が減っていた

「……ふっ、なるほど数本のナイフを壁代わりにしたということか。ずいぶんと諸刃の剣いや、盾だな。戦略破壊魔術兵器が破壊されればおしまいなのだろう?」

「まあな。けど安心してやワイもそこまで馬鹿とちゃう。それにこ

のストリームフィールドは666本で1つの武器。全部同時に破壊されなかったら回復するんや」

だからこそ、霧埼は666本の内のおおよそ3分の1を防御にまわした。計算違いはその3分の1のほぼすべてが破壊されたことだった。しかし

（とはいえ、なんやいつもより回復が早いなあ）

そう、数10本程度ならすぐに再生できるが今回はおおよそ3分の1が破壊されたはず。それなのにいつもより早く回復するのが使い手の霧埼にはわかった。

（まあ、ええかそんなん。……今は、目の前の強敵が最優先や！）

「ふむ、どうやら侮つていては勝てんようだ……とはいえ、あまりこのような戦いをしていてはその内止められる。今の私の全力でいかせてもらつ。おまえも、報告にあつたスバルに使おうとしたとおきとやらで来い！！」

明らかな挑戦と挑発だが

「ええで、見せたるわ！」

霧埼はこれを受けた既にナイフは回復完了はしている。だがこの相手は武器の能力を見た限り相性は悪い。その理由は先の連結剣だ。先ほどのように全方位の攻撃でも、あのように弾かれ反撃されればやられる。だが、とっておきならあるいは……………

（どのみち、長期戦にでもなつたらこつちがやられる。ワイは喧嘩

の歴は長いが、あつちは戦闘になれたマジもんの軍人。^{フロ}ワイが勝つにはこれしかない。せやけど)

「けどほんまにええんか？正直喰らったら死ぬで？」

「その時の対策はすでに高町達に話している。安心しろ」

「なら、お言葉に甘えて……………」

霧崎はすうと一度深呼吸を短く行う。そして

「見せたるでえ！！これがワイの全力や！！！！！」

すさまじい魔術^{ルーン}がどんどん練られていき、行き場を失ったものは大気中^{エーテル}で魔力粒子となって消える。そしてそれが収まると、霧崎の武器が全て獲物がいる前方に収束していた。

「——黙示録に記されし皇帝——こいつがワイのとおっておきや」
ネロ・アボカリユプス

《黙示録に記されし皇帝》
ネロ・アボカリユプス

666本のストリームフィールド^{エイレナイオス}を踊り狂う悪魔によって一本の剣にして扱う霧崎の持つ神話魔術^{きりふだ}。微弱な攻撃力を持つストリームフィールドだが、このようにすべてを1つにまとめることでその攻撃力、貫通力は元の本のナイフの666倍以上の力がある。並大抵の攻撃では、数あるナイフの先端部分の数十本しか壊せず、串刺しのバラバラになる。

「なるほど、たしかにとっておきと言っただけはある……では、こい！！」

「ああ、いかせてもらうでええええ！！！！」

666の集約された最凶の牙がシグナムに襲いかかる。対するシグナムは

「……………」

「なっ！？」

なんと戦闘にはあり得ない眼を閉じるといふ行爲を行った。それだけではない剣も鞘に戻っていた。だが

「いくぞ」

「！？」

ぼそつと聞こえたその声に霧埼が震える。そして

「飛竜、一閃！！」

訓練場のフィールドに爆音と煙、そしてまぶしい光が照らされた。

訓練・紗雪編（後）／霧埼VSシゲナム（後書き）

今回、紗雪と霧埼がもった違和感についてもいずれ説明します。
ヒント、りりなのの世界・（ミッドチルダ）

実習中はまったくと言っていいほど書けないのでじかいはたぶんかなり時間がかかります。

読んで下さったらそれだけで感謝感激です↑やっぱ表現古いかな？

ww

感想・質問とうはなるべく早く返信しますのでよろしければ書いて下さい
それでは

訓練終了／動く影（前書き）

どうもっす

いつもより更新が遅れてすいません

つか、これから少し遅れることが多くなるかもしれませんが、ガンバ俺！

訓練終了／動く影

REIZI・YOSINO

その戦いを見ていて零二達はただ驚くしかなかった。霧埼は実力はかなりある召喚せし者だ。それが苦戦を強いられているのだから。

（つか、フェイトさんおろおろし過ぎ……）

先程から危ない瞬間にはすぐおろおろしているフェイトを見ながら零二はこの戦いを見ていると、ついに霧埼が自身の切り札を使ったの見て驚いたと同時にこれで決着がつくとすぐに理解した。

なのはとフェイトもそれにすぐさま気づき、いつでも動ける体制になる。

（万が一の時は復元ダ・カーボされる世界をつかって戻すしかないな）

そしてついに霧埼が動いた。だがシグナムは動くどころか眼を瞑った。

「「なっ!?!」」

それには紗雪も驚いていた。物語とは違い戦闘中に目を瞑るという行為は自殺行為でしかないのだから当然ともいえる。ところが、

「うそ、だろ」

光と爆風が収まるとそこには壁に打ち付けられて気絶している霧埼

の姿があつた。とにかく零二はすぐに下に降りた。そこには

「はらほれひれはれほ」

目を回して気絶する霧埼がいた。

「またベタなセリフをつてそんなことより、一体全体何が起こったんだ？」

零二は正直霧埼が勝つだろうと考えた。だがこの結果が彼の召喚せし者のとしての常識外のためさすがに困惑していた。

「なに、すべては私でも破壊しきれないだろう。だから、破壊できるだけ破壊して、抜け穴を広くしただけだ」

「なあっ!？」

あつけからんと言うがそれは常人の人間にはできない行為だ。その証拠に、シグナムは分かり難いが怪我をしていた。だがそれだけで済む方が異常なのだ。

「…………… いったい、あなたは何者ですか？シグナムさん」

「ふっ、なんでもないさ。ただ、お前たちより長く生きて、実践経験が多い。それだけだ」

零二の質問にそう答えシグナムは武装モードを解き、機動6課の制服姿で地上に降り立った。

「でもシグナム、さすがにさっきのは危ないよ」

「ふむ。すまなかったなテストロッサ。どうも真剣になりすぎていた」

「もう。リミッターが掛けられてますけど、そっちの方ももう少し自重^{せいじゆう}して」

「うむ、努力しよう」

とはいうが、少しもそのようなことは思っていないのは言うまでもない。

「つか、フェイトさん。今言ってたリミッターって？」

「ああ、それね。隊長、副隊長クラスにはみんなリミッターが掛けられるの。一部隊に確保できる魔導師ランクの総計規模は決まっているから、それに合わせるための、一種の裏ワザだけだね」

「なるほど、少しでも強い部隊にするために、そういうリミッターをつかって他の所から取り寄せるってことですね」

「そう。まあ、それ以外にも、信用における人物で、仲のいい人と同じ部隊にするのもあるけど」

と、少し苦笑ぎみにフェイトはそう言った。

（つか、それであの強さか。元はどれだけ強いんだか……）

「さて、次は芳乃君だね。確か能力は……」

「それなら今見せます。シグナムさん、隠してるようですが、怪我しているところ見せてください」

「むっ、気付かれていたか」

と言うと零二はシグナムの方によりその能力をつかう

「——復元ダ・カーボされる世界——」

蒼い魔方阵が出現し、シグナムの怪我をした手足に魔力粒子エーテルが包まれる。

「ほう、傷が全くない。たいしたものだな」

「ほんと、すごい！」

「つつても、直したんじゃない、戻したんですけどね。俺の能力、《復元ダ・カーボされる世界》は、万物を戻す力。24時間前の物なら大抵戻せます」

「大抵ということは、戻せない物もあるのだな」

シグナムのその質問に

「ええ、あくまで魔力を使って起こす奇跡です。だから、魔力は戻せないし、勿論、戦略破壊魔術兵器も戻せません」

少しだけ誤魔化しと黙秘をした。正直零二はここで彼ら同様、本気「全ての力は明かさないうように考えた。それは紗雪、そして意外なことに霧崎でもある。」

（ああ、見えて抜かりがないからな。それに、若干いつもよりナイフの攻撃が遅かったしな）

その理由は単純明確。彼らは出会って間もないからだ。信用はするが、疑いもする。そういう関係にしている。

（まあ、はやてさんみたいな人には俺達の考えは気付かれてるだろうがな）

と考えていると、バリアジャケットを装備したなのはが下りてきた

「となると、攻撃手段はもしかしてこの前のあれだけ？」

「ええ、今俺が使える中では、あの神討つ拳狼フエンリスヴォルフの蒼槍がやつらには有効だと思います」

フエンリスヴォルフ
「神討つ拳狼の蒼槍……それはいったいどういう技なの？」

フェイトは紗雪、霧埼、零二の能力を聞いてその技もそれと同様凄まじい力を秘めていると思った。それはなのはとシグナムも同じ思いだった。だが、

「えええと、言いにくいんですけど……単なる魔力を拳に乗せたストレートパンチを放出してるだけです」

「……」

あまりに単純かつ信じられない答えに全員が絶句した。

「ちょ、ちょっとまって！一見簡単に言ってるけどそれすごいよ！」

「うん普通、魔力を拳にのせるなんて無理だよ！」

本来であれば何らかの手段を用いて魔力を魔術エネルギーへと変換させなければならない。

例にあげるのだとすればスバルである。スバルもそれと似た技術を使うことができる。だがその為には、デバイスによるエネルギー変換、魔力調整を行うことで可能となる。何もなしにそれを実現するのは無理に等しい。だが、

「まあ、俺の場合無意識な部分もありますから」

そう。零二は無意識下に擬似概念魔術兵装として拳へ纏う事で、その“矛盾”を無くしている。勿論こんな芸当は優秀な召喚せし者でもそう簡単にできることではない。仮にできたとしても、その威力は高が知れる程度だろう。しかし、

「それに俺の魔力総量は紗雪や霧埼よりも、圧倒的に多いんです。だから、あの威力が出せるんです。とはいっても、魔力を拳に籠めただけですから、これで戦略破壊魔術兵器を破壊することはできませんが」

「……………」

「なるほど、天性の天才というやつか」

シグナムはぽつりと、面白いものを見る目でそう言った。

「まあ、ともかく。そうすると今回の訓練は威力測定と、復元^{ダ・カ}する世界の維持時間の測定ってことでいいかな？」

「はい構いません」

「それじゃあ、まずは威力測定。とりあえず、今出せる全力であれを撃墜してみて」

なのは提案を許可した後、フェイトが言った場所を見ると、数百機はいそうな数のガジェットだった。とはいえ停止しており、攻撃もしてはこない。

なのは達は攻撃に巻き込まれないよう、フォワードと紗雪達と共にフィールドから離れた。

「さて、やるか（まあ、あの時よりは強めに撃つようにはするが、本気の本気はやめておこう）」

零二はゆっくりと深呼吸をし、集中する。

「はあああああああああ！！！！！！」

身体全体から蒼い光が出だし、魔力で零二の体を包み込む。だがそれも一瞬で、すぐにそれが右腕にへと集まり、それが右拳に籠められる。

（！？なんだ、いつもよりいい感じに魔力が引き出せてる。それなのに、これ以上うまく制御ができる気がしない）

とつさに危険に感じた零二はすぐにその拳に込められた魔力を一気

に放出するために前に突き出した。

「フェンリスウオルフ
神討つ拳狼の蒼槍——！！」

列車の時の倍は超えている威力が正面のガジェット達へと向かっていく。

結果、彼の一撃は本気ではないとはいえ、数百機のガジェットを七、八割、ほぼ殲滅はできた

「ふう、ふう、なんだ？やけに疲れるぜ」

その後、零二の復元する世界ダ・カーボの維持時間の測定として、廃されたものをどれだけ戻せるかテストをし、零二のストップかかるまで行い、とりあえず今回零二達が行う訓練は完了し、フォワードのメンバーも終わった。そして、

「芳乃君達のポジション決定したよ」

なのはに言われてそれを教えてもらった。

零二・FB
フルバック

紗雪・GW/ガードウイング場合によってはCGセンターガードも兼

霧埼・CG
センターガード

サクラ・????

「なんや、サッカーみたいやな」

「まあ、わかりやすいがな」

「あははは」

霧崎のツツコミに苦笑するのではあった。

「ところで、サクラはどうするんですか？無理やり連れて来てもたぶん無理そうですね・・・」

「うーん」

となのは達がうなだれていると

「おいマスター」

「噂をすればなんとやら………サクラ！」

日も落ちかけのころにサクラがとことんやってきた。が、そこにいるサクラは普段とは少し違っていた。

「マスターみてみてこの首飾り！」

そこには桜の花弁をモチーフにした首飾りをつけたサクラがいた。

「なんだそりゃ？まさか、どっかから勝手に持ってきたのか！？」

「ぶっ何でいきなりそういう方向に行くかなあ」

ふんぷんと、サクラは頬をふくらまさせて言う。

「じゃあなんだってんだ？」

「えとね、シャーリーさんがくれたんだよ」

「シャーリーさんが？」

「さ、サクラちゃ〜ん」

と息を切らせながらシャーリーがくる。ちなみに訓練の時途中までいたが少しして用事ができたと隊舎に戻っていった

「さ、先にいかないで。はあ、はあ、まだ説明もしてないから……」

「あ、ごめんなさいなんだよ〜」

「まーたお前は迷惑かけてんのかっ!」（でこぴん）

零二はサクラのおでこにでこぴんをクリーンヒットさせた。

「あたあ! いたいんだよましたあ〜」

涙目でサクラはそういう

「うるせえ。だいたい……………」

「まあまあ、芳乃君落ち着いて」

「うーありがとうなんだよなのはさーん」

となのはが止めるとサクラはわざとらしくなのはにすぎった。

「ったく！で、それはなんなんですか？」

と少し怒り気味でシャーリーに尋ねた。

「えーと、この前芳乃さんが言ってたそうじゃないですかサクラちゃんマボウツカイの補助装備の中にあいての戦略破壊魔術兵器と召喚せし者の能力を瞬時に見抜いて記憶する能力があるって」

「ええ。でもそれは俺とサクラしか」

「だから、それを私達でも見れるようにしたのがこのペンダント！」

「そ、そんなことできるんですか！？」

零二は心底驚いていた。いや、紗雪と霧埼も同じ考えだったのか驚いていた。

「私達が知っているデバイスがサクラちゃんにとって擬似型戦略破壊魔術兵器レプリカマボウだつて聞いて、それでレプリカでも戦略破壊魔術兵器に近いなら、デバイス同様にサクラちゃんにアクセスができるかもって考えて徹夜で作ったの」

「ちなみに、私は許可を出したんだよ」

「また勝手におまえは………つか、体中を見られるのと同じだから

いやとか、最初に俺と真理融合アクセスした時の言葉はどうした？」

「マスターは私のすべて、これは一部だもん。それにマスターみたいに何でも見せるわけじゃないし」

「誤解を生むようなこと言っな！！」

「まあまあ、落ち着いて兄さん。ともかく、それが本当なら私も少し見てみたい」

「ワイもやな」

紗雪と霧埼が言いだすと他のメンバーもそう言いたげな顔をする。

「あああもう。んじゃ、やってみろサクラ」

「うん。それじゃあ……あ、なのはさん達でもできるみたいだからやってみるんだよ」

「え、そうなの？でもどうして」

「擬似的でも戦略破壊魔術兵器を使うものだから、言葉違えど魔法使用ホウツカイだからかはわからんが、おそらくいずれかだろうな」

スバルの疑問にシグナムが答えた。

「それじゃ、とりあえずなのはさんから行くんだよ……………」

なのは達を10秒ほど見つめ、神経を集中し目瞑る

「――アクセス真理融合――」

サクラのもつペンダントが一瞬光るとバツと電子と魔力粒子エーテルでできたモニターが現れ、そこにはなのはの武器、レイジングハートを構えたバリアジャケット姿のなのはと、そのバトルステータスがあった。

高町なのは

武器：レイジングハート

BATTLE STATUS

破壊力：A

スピード：C

射程距離：A

持続力：B

機密動作性：A

魔力総量：A

成長性：F

「す、すごい。ホントにみれる」

「というより、やっぱりなのはさんすごい」

「さすが管理局のエースですね」

零二は自分以外にも《ミームスフルン対魔術兵器戦略思考》が見れることにティアナとスバルはそのバトルステータスに驚いていた。

「ちなみに、なのはさん達はリミッターをしてるらしいが、これはそれを含めていない状態のデータか？」

「へーそうなんだ。でも、含めていないって考えていいんだよ。とは言え、ここにあるのはほんの一編だから、これですべてを把握したわけじゃなくて、あくまでデータだってことを分かってほしいんだよ」

「へー……あつじゃあ私とティアのも見せて」

「ちょ、何勝手に……」

「OKなんだよー」

スバル・ナカジマ

武器：マツハキヤリバー

BATTLE STATUS

破壊力：B

スピード：C

射程距離：C

持続力：体力・精神力次第

機密動作性：E

魔力総量：B

成長性：A

ティアナ・ランスター

武器：クロスミラージュ

BATTLE STATUS

破壊力：C

スピード：D

射程距離：B

持続力：B

機密動作性：B

魔力総量：B

成長性：A

「すごい！！サクラちゃんすごいよー！！」

「えへへーありがとうございますんだよスバルちゃん」

サクラはスバルに褒められ照れていた。

「うん……フォワードのはあとでデータにまとめて送ってもらえないかな？訓練メニューの製作に役に立つかもしれないから」

「かまいませんが、それは俺がやります。サクラにやらせたらどうなるか分かったもんじゃない。シャーリーさん後で色々と機材やなんやの使い方と一緒に教えてください」

「かまわないよ。それじゃあ、早速来てくれないかな？サクラちゃん」

「わかりました。サクラいくぞ」

「マスター、それで、これどう？かわいいでしょ？にあつかなあ？」

零二は見せびらかすサクラを少し見て

「……………馬子にも衣装だな38点」

といつも通りの辛口評価を下した。

「微妙なんだよマスター！」

「うるせえ。自分からかわいいでしょとか言うような奴に似合うか」

ぶーぶーと口でいいながら零二が隊舎にもどり出すとみなその後を苦笑して追い始めた。

「?ティア」

「え?ああ、ごめん紗雪今行くわ」

ティアナも遅れて歩き出すが、その心は曇っていた。

(私のバトルステータス、思ったより低かったな……………)

後にこの感情があの子体を巻き起こすことはティアナを含めだれも知る由はなかった。

SIDE・END

TYR

騎士の鎧が動く音が響く。それを身に着けたテュールは若干イライラしながらスカリエッティの研究施設の通路を歩いていた。スカリ

エッティに呼び出されたからである。だがそれはどうでもよかった。それとは別にイライラしていた。その理由は

「おい！もう少しお前は早く歩けないのか！」

「えゝめんどい」

うしろにいる1人の男にイライラしていた。その男は金髪で手入れをあまりしていないのか、ぼさぼさの髪をしていた。服装はほぼ黒一色の服装だ。

「だいたいさあーお前さんのその服装どうにかなんない？見てるこっちが恥ずかしぜ」

「貴様もその性格を直せ」

テュールがイライラする最大の原因である彼はそんなこといざ知らず、どんどんテュールの逆鱗に触れる。

「つかさ、俺はお前らの仲間じゃないし、俺は俺の好きにしたいんだよ」

「貴様、協力するとは言っただろ？」

「言っただけ？」

「……………今すぐお前を殺してもいいか？グレイブ」

その視線で相手を殺してしまいそうなほどの眼で睨みつけた。

「おいおい、そんなことあいつが認めないんじゃないか？まあやるってんなら相手になるぜ」

グレイブと名乗るこの男はそれに動じることもなく、それをにらみ返す。一触即発の雰囲気は彼らを覆う。

「そこまでにしたまえ。ここでやり合えば大変なことになる」

とスカリエッティの声がし、2人は彼を見る。どうやらいつの間にか目的地についていたようだ。

「で、なによんだいスカリエッティ？『運^{オレ}』の力があるのか？」

グレイブは楽しそうに言う

「いやなに。少ししたらこの場所でオークションが開かれるのでね。そこに彼らが間違いなく来るだろう。あの人型の戦略破壊魔術兵器^{マホウ}の力を試すには十分な場所とは思わないかい」

「つまり、それができるように我々がサポートをすればよいのですね」

「ああ、そうさ。理解が早くて助かるよテュール」

「なら、ついでに俺らんとこにる奴から1人選抜して連れて行くぜ。そろそろあいつらを使うのもいいだろ」

「グレイブ！それには許可が…」

「ああ、それなら構わないよ」

テュールが言い終わる前にスカリエッティはそれを言い放つ。

「なら、いいですが……………グレイブ、それでどいつを連れていくんだ」

「んーそうだなあ」

「私が行かせてもらうわ」

と、彼らの会話に1人の女性が入ってくる。姿の主は影に入り、その姿を隠している。

「……………きみが？」

「決定だな」

「簡単に決めるなグレイブ！」

3人は彼女の意見に少しながらも驚いていた。

「あのお方に言われてか？」

「いいえ。自分の意思よ」

「……………信用するわけではない。だから一応言っておくが、我々の命令に背くなら消す。私はあのお方とは違い躊躇わないのでな」

「胆に銘じておくわ」

テュールの警告にそう言って下がる。どこか得体のしれない彼女を
3人は見えなくなるまで見ていた。

その黒いドレスと長い金髪の髪が暗闇で静かに動いた

訓練終了／動く影（後書き）

今回出したなのは達の3人ステータスは正直かなり悩みました。これは違うだろ！または、いいと思うと言う方がおりましたら、どうぞ感想の方へあと、ほかのリリなのキャラのステータスも出せたら出します。少なくともフェイトとエリオ、キャラ、あとはやてはだしたいなあ

今回のアグスタ編でfortissimoのキャラ（零二達を除いた）が3人程でる予定です。

1人は皆さんもう気付いてるでしょうが

ホテルアグスタ（上）（前書き）

長くなりそうなので、分けました！

ホテルアグスタ（上）

REIZI・YOSINO

零二達がこの世界に来て1週間がたつたころ。ここでの訓練やミッド語、それに金銭についてに慣れてきたとき、ついに零二達が管理局の民間協力者として初の任務が来たのだ。が……

「……………」

ここにいる男性陣+はやて以外の女性は全員冷たい眼で霧崎、ヴァイス、そしてはやてを見ていた。ちなみに零二はこの状況を無視している。

「え、えーと、その」

「……どうしました？はやて部隊長？」

にこにこしているが、めちゃくちゃ怒っているのはとフェイトである。

なぜこんな事態になったかと言うと、少し前にさかのぼる

それは、とある日。その日の訓練後が終わった後のことだった。その日も零二はシャリーに呼ばれサクラのと共に機材の説明を受けていた。そしてほかのメンバーは先に汗を流すことにした……だが、そこ1人の変態と言う名のバカが動いた。

言わずともわかるだろう霧埼である。霧埼はまず隊舎に詳しくなおり且つそこまで硬くない男を選抜した。それはヴァイスである。

当初ヴァイスは反対していたが霧埼の

「男なら……いや、漢^{オトコ}なら見るべきや!!」

と言う一言から始まった約10分間による説得によって彼も加わり、さらにそれを聞いていたはやてが

「私も見る!!」

と言いだした。当初霧埼とヴァイスはその言葉に困惑したが

「わたしは皆の胸の発育具合を無防備な状態で確かめたいんや!…
…ほんとのこと言うと直接触りたいけどそれが最近できんかったん
やけど、これはチャンスや!」

と言う訳ではやても参加した。そしてのぞける穴があるポイントで
除いていたが、まお…じゃなくてなのはに見つかり――
ここから先はご想像におまかせします。

ちなみにその日零二達はどこからか悲鳴が聞こえたという。

と言うことがあったためこの3人はめちゃくちや白い目で見られて
いる

「ん、んん!!と、ともかく現状で分かったことと、今日の任務に
ついての説明や」

とはやてがいうとさすがに皆、真剣な顔に戻り、話を聞く。

「これまで謎やったガジェットの製作者およびレリックの収集者はさっきの資料でも見せたけど、違法な研究で、広域指名手配されとる次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティの線で捜査を進める。そして、今回の任務は、これから向かうホテル・アグスタで取引可能なロストロギアもあるから、それをレリックと誤認したガジェットが来る可能性があるから、人員の安全確保と施設警護が今回の仕事や」

「質問いいですか？はやてさん」

零二が手をあげて問う

「どうしたん？」

「まず、さっき言ってたレリックって何ですか？いいかたからして、それもロストロギアなのはわかりますけど」

「わちしたちも、ようわかつとらん。ロストロギアに認定されるものは魔力が異常に高い物質、未知のエネルギーや危険なエネルギーのある物、何に使うか分からない物こいうった物がよくなることが多い。今回に関してても未知のエネルギーと何に使うか分からないから、ロストロギアにされたんやけど」

「じゃあ、もうひとつ。ガジェットがロストロギアを狙うならサクラも……」

「それなら大丈夫。サクラちゃんが今着けとるブレスレットは、ロ

ストロギアの反応をださないためのケースを元に作った特殊な装置や反応は抑えられるから、安心してや。ただし戦闘態勢になるとその効果も薄まるから、気を付けること。それと今回はその実践でもあるから、芳乃君とサクラちゃんは内部警護や」

と言われてみると、確かにサクラは白いブレスレットを左腕にしていた。

「なら最後に1つ。紗雪がいないみたいなんですけど、何かあったんですか？」

「それは私から説明するわ」

と声をあげたのは機動6課の医務室の室長を務めてもいるシャマルであつた。その隣には青色毛と赤い瞳をした大型の狼ザフィーラがおとなしそうに座っている。

「紗雪ちゃんは最近自分の能力の瞬間魔力換装を使つてる際に異常というか、変な違和感を感じるつて言つてたから検査。本人は悪い感じはしないけど、瞬間魔力換装の連続使用が体に負担がかかりすぎてる可能性もあるから一応検査をするつて言つてたわ」

シャマルは紗雪に聞いたことと合わせてそう伝えた。

（能力に異常？偶然か……………）

零二はつい最近にも神討つ拳狼の蒼槍を訓練で撃つた時に感じた違和感を思い出していたが、とりあえず今は今回の任務に集中することにした

「あの、私もいいですかシャル先生？その箱はいつたい？」

とこんどはキャラが問う。指をさした先にあるのは少し大きめの箱が並んでいる

「ん、ああこれ？ふふふ、隊長とサクラちゃんそれと芳乃くんたちの、お仕事着」

とどこか楽しそうにシャルは答えた

ホテルアグスタ内部。零二はパーティー用のタキシードを着ていた

「なんでこうなる」

零二とサクラは共に内部の警備。はやて達もそうだがこのような場所でも6課の制服を着ていると逆に周りも何かあるのかと不安になる。そこで、内部は周りに溶け込むために、この仕事着ことスーツを着るとはやてに言われて零二は着ることにした。

「いやあゝ結構にあつとるで芳やん」

とは言うが霧埼はどう見ても笑いを抑えていた。

「俺にはこういう服は似合わないんだけどな……つか、笑い抑えてんじゃねえ！」

「いや、こないなおもろくて珍しい芳やんの格好はもう見れんし、そう思うと余計腹がくつくつ……！」

と今度は腹を押さえて笑いだした。

「霧埼いてめえ……」

「おっと、コワイ、コワイっとな、ワイは外周りの警備やけん」
といいその場から逃げていった。

「たく！にあわねえことくらいわかるっての」
と少し自虐的になっていた時だった。

「まーすーたー」

「おっ、サクラお前も着替え……………て……」

その時零二は、一瞬言葉を忘れた。

「どう？似合うかな？」

サクラのドレスは以前買った衣装とは違い、装飾品が多く付き、サクラの名の通り桃色と白色の2色がうまく混ざっており、とても綺麗であった。

「マスター？」

「！ああ、まあまあだな」

思わずぼーっとしていたがすぐに気持ちを落ち着かせ、そう答えた。

「むーもつと気の利いた言葉はないのマスター！」

しかしその感想が不満だったのかサクラは子供のように怒りだす。
そこに

「まあまあ、サクラちゃん落ち着いて」

「そうやで。それに最初だまっとたちゅーことは、見とれてた証拠や」

「というより、芳乃君はそれがわかりにくいんだけどね」

と、あとからきたなのは、はやて、フェイトが順に言う。こんどは3人共のドレス姿だが3人ともそれぞれ自分に合った色を選んだドレスもはやその美しさはビーナスでさえ嫉妬する美しさである。

「……………」

さすがにそれを見て零二も顔が少し赤くなった。

「ぶーーー!!」

そんな零二をみてサクラは頬を膨らませて嫉妬していたのは言うまでもない。

SIDE・END

TEANA・LANSTER

ホテルの外回りの警戒していたティアナはスバルと念話を行っていた。

「それにしても、紗雪、大丈夫なのかしら検査って言ってたけど」

「さあ、本人は大丈夫って言ってたけど。……………ティアも心配なの？」

「「なっ！そ、そりゃ、次元漂流者といえ、6課の仲間なんだから、当然でしょ！！」」

ティアナはあわてたように念話と共に声に出していう。顔を赤く染めているのを見られなかったのは幸運だっただろう。

「でもまあ、今日は、八神部隊長の守護騎士団も全員集合してるから、特に今日警備には問題はないと思うけど」

「それもそうね……ところで、あんたは結構詳しいわよね？八神部隊長とか副隊長達の事」

はやて達の話題になり、ティアナはそれに質問する。

「うーん、あたしも詳しくは知らないんだけど……………八神部隊長の使ってるデバイスが魔導書型で、その名前が夜天の書っていう事。副隊長達とシャマル先生、ザフィーラが、八神部隊長個人が保有してる特別戦力で、さらにそこにリイン曹長合わせて6人揃えば、管理局の無敵の戦力って事。まあ、八神部隊長達の詳しい出自とか能力の詳細は特秘事項だからこのくらいしかわからないけどね」

「レアスキル持ちは、みんなそうよね」

「ティア、何か気になるの？」

スバルは長くティアナとパートナーだったためか、微妙な変化に気が付き聞いたが

「別に」

と言ったのでスバルは深くは考えずティアナとの念話を終えた。しかし、ティアナは少し悩んでいた。

（6課の戦力は無敵ではなく異常のレベル。隊長は全員オーバース、副隊長はニアSランク。あの若さでBランクのエリオと竜召喚のレアスキルを保有しているキャロに危なっかしくはあっても、潜在能力と可能性の塊で、優しい家族のバックアップもあるスバル。そして、次元漂流者の召喚せし者と言われる芳乃さん達…）

ここ最近零二達が来てさらにティアナは焦り出してきた。その理由は自身が凡人というものである。サクラが見せたステータスもティアナは不満だった。

（けど、そんなものは関係ない。私は、立ち止まるわけにはいらないんだ……あの人のためにも）

ティアナは気持ち引き締め直し、自身の目的だけを考えることにした。

SIDE・END

GRAVE

グレイブはホテルアグスタに入り、中の情報を集め終わり、ぶらぶらしていたところにテュールから念話による通信が入っていた

「あゝめんどい」

「作戦開始までは時間はあるが、すでにガジェットはそちらに向かっている。動く準備はしておけ。それと……」

「わあてる。今回の目標の監視だろ。気づかれないようにするさ」
めんどくさそうにグレイブは答える

「つかさ、ガジェットだけで大丈夫か？俺やお前、それとあの女はまだ顔を出しちゃダメなんだろ？」

「安心しろ。つい先ほど、ルーテシアたちも協力することだ」

「あっそ。んじゃ、また後で」

心底どうでもいいといった感じでグレイブは念話を終わらせた。

「まあ、オークションとはいえ、こ……
ういうとこに来るのは久しぶりだし、抵当に……ってうおあ……」
「きゃ！」

角を曲がったところでいきなり人と出くわし、グレイブは尻もちをつく

「つてて！気を付け……ろ……」

「すみません！怪我はありませんか？」

グレイブは一瞬我を失う。いや、そこにいる女性のあまりの美しさに、彼は息をするのをはじめて忘れてしまったのだ。

「あのー？」

「！？あ、ああ大丈夫だ」

と見ると女性が手を伸ばしていた。

「！？」

グレイブはそれが何の意味で伸ばされた手かはわかっている。自分を立たせてくれようと手を貸してくれていると。しかし、

「あ、あんた俺に何かしようつてのか？」

と彼の癖で聞いてしまった。

「えっと、そういうつもりじゃなかったんですけど……気に障ったらごめんなさい」

（……！！なんだこいつ！？なんで謝るんだよ？なんでこいつは……！！）

「あの、どうしました？」

「！べ、べつになんでもねえよ！そ、それじゃな！」

と逃げるようにその場を猛スピードで離れた

「なんだっ たんだろうね、バルディッシュ」

【さあ？】

フェイトは十数秒だけグレイブが走り去った所を見ていた

「ぜえ、ぜえ、ぜえ、……………なんだよあいつ…それに……………」

グレイブはずっと先ほどのやり取りを思い出していた。

「たしか、あいつはスカリエッティの資料にも書いてあったな…たしかフェイト・ハラオウン・テストロッサ」

ちらつと見ただけではあったが、資料に書かれた人部の名前を思い出した。

（あいつ、俺に本当の意味で、手を差し伸べた…今までの奴らは、どいつもこいつも）

とそこでグレイブは自身の過去を思い出そうになり、それを振り払う。

「それに、なんだ…俺？さっきからあいつのことばかり考えてる……………」

グレイブはこれがどういう感情なのかはわかっていた。だが彼の生きてきた過去とこの感情が初めて生まれたのが同時にあり、認めるのに少しだけ時間がかかった。

（そっか…これが）

そうして認めてしまえばあとは簡単だ。どんどん思いがあふれてくる。

（やべっ、俺完全に惚れてるわ）

彼は自分が恋をしたと認識した。だがそれは、彼にとって最高の形だった。

「グレイブ、おいグレイブ聞いているか？」

「んだよテュール！人がせっかくいい気分だったのに！」

「知るか。それより、そろそろ作戦開始だ」

「へいへい。んじゃ、この施設の内部データを送る。内部の映像付きだ」

グレイブはアグスタ内部で手に入れたデータを外で待機しているテュールに送信した。

「これはいい。内部についてもはっきりわかる。後は目標のいる位置を確認できればいい」

「それなら安心しろ。いま、離れた所から監視しているからよ」

「わかった。監視を怠るな」

それだけ言ってテュールは念話を終わらせた。

「めんどろだが、今回はあいつの命令だし、聞いてやるか」

そう呟きながら目標である零二とサクラを見ていた。

SIDE・END

REIZI・YOSINO

人がオークション会場に集まってきたころ、零二とサクラはその光景を見ながら話していた。

「にしても、こうしてるとたまに別の世界に来たっていう実感が持てないな」

「うん。たしかに」

「まあ、お前の場合はどこに行ってもかわんねえけどな」

「どういうことマスター！」

「そのまんまの意味だ」

零二がからかうとサクラは「ムキー」と怒り出す。

「まあ、それはいいとして、ここならだれかに聞かれることもないしずっと聞けなかったこの前のことを話してもらっぜ」

「???なんのこと?」

「忘れてんのかよ！……こっちに來た時、俺の能力が一部が使えず、弱体化した理由だ。お前、あの時何か話そうといてただろう」

そつあの後はサクラが魔力を感知し、それから後も色々あり話す機会がなかったのだ。

「それは……たぶん、私のせいでもあるんだよマスター」

「どういうことだ？」

「おそらくなんだけどね。マスターが使ったあれが原因だと思う」

「……」

サクラの言うあれと言うものに零二は覚えがある。いや、忘れられるものではないのだ。

「《究極魔法》か？」

「うん。あれだけの魔力全て使い、私を含めた全てをも再び召喚した。こんな無茶苦茶な事をやってのけたんだから、魔力も回復にはかなりの時間がかかるし、不安定なんだよ」

「なるほどな。だが、お前はどうなんだ？お前は完全自立型の人型スタンドアロン戦略破壊魔術兵器とはいえ、俺の武器だろ？何かしら制約とかないのか？」

「あると言えばあるかな。けど、切り札はいつも通り使えるよ。全力はしばらくは無理だけど」

サクラは笑顔でそう答える。

「OK。なら、ひとまずは大丈夫だが、一応言っておくが、これは紗雪と霧埼には教えてもいいが、他の奴にはしゃべんなよ」

零二はサクラに念を押すように言う。彼自身は6課のメンバーは9割ほど信用しているが。それでも1割は疑っている。そもそも零二も含め機動6課は信用しているが管理局は信用していなかった。

「うん。わかつたんだよ！」

「よし。なら、なのはさんに今の状況でも……っと通信か」

渡された携帯型の通信端末が鳴る

『芳乃くん、敵が来たよ。とりあえず私達は連絡があるまで内部警備を続行』

「わかりました」

それだけ言って通信を切る

「大丈夫かな？」

「心配ない。シグナムさんや霧埼もいるんだからな」

そうは言うが外に出て戦いたいという思いはあったが……

SIDE・END

ホテルアグスタ（上）（後書き）

次回に3人ほどfortissimoキャラが出る予定です。

あと、少しですがテュールの能力が出ます。

テュール「ようやくか…いつになったら私やグレイブも含め全て話すのだ」

ずいぶん先？つか、最後の方？

テュール「ほう……………」

え、ちょ、まつ…！

作者が消されたので本日はここまでです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9719s/>

新たなEXA

2011年11月1日22時17分発行